

青い唐辛子の春

shunzamurai

”箱根駅伝で死者”

1月2日水曜日、毎年多くの感動を生む箱根駅伝で死者がでた。
原因は交通事故による後頭部強打。
中央大学のランナーとして8区を走っていた谷口明人選手は、コースを誤り一般道路へ侵入。
そのまま軽自動車と衝突した。
谷口選手は病院へ搬送されたが間もなく死亡が確認された。
警察は、なぜ谷口選手がコースを誤ってしまったのか調べるとともに、運営側にも過失があったことも視野に入れて捜査を続けている。

12月24日

晴れのち曇り

「なあ谷口、本当にやめるのか？卓球部」
卓球部とは到底思えない筋肉質の男、牧野は尋ねた。
「うるせえよ、もう決めたんだ。」
「ええ...せっかくここまでやってきたのにさ、もったいないじゃんかよ」
俺はその言葉を、待ってましたといわんばかりにきりかえした。
「もったいないってなんだよ。プロになれるわけでもあるまいし。だいたい卓球なんてだっせえんだよ。もう飽きたからやめる。ていうか、」
俺は続けて言った。
「俺をひきとめるなら、俺より卓球強くなってからこいよ。」
「あ？」
さすがにこれには牧野も怒るらしい。
牧野は顔を真っ赤にして俺をにらみつけた。言葉は出てこないが、これは相当だ。
こめかみに血管が浮き出ているのがその証拠だ。鼻息が荒くなって、俺の顔にまで届きそうだ。
俺よりも一回り体がでかい牧野が怒ると、まるで蒸気機関車のような迫力がある。
前に一度、こいつの好きな女の子をクラス中にいってまわったことがあったが、そのときも同じ顔をしていた。俺と蒸気機関車はぐるりと教室を一周し、並んでいた木製の椅子は大名行列に頭を下げる町民のように道を開けた。
「誰のために言ってるよ...」
ゆらりと牧野が近づいた。

牧野の鍛え抜かれた肉体がさらに膨らむ。筋肉がギシギシと音をたてている。

それを見て、へらへらしていた俺の笑顔がしぼんでいく。

ちょっとこれはまずい。

にげる

たたかう

頭の中でRPGゲームみたいに選択肢が表示した。逃げた自分と戦う自分を想像してみたところ、どちらも悲惨なものだった。自分から挑発しておいて逃げるのは論外だし、たたかう...ケンカは勝てそうもなかった。腕をへし折られそうだ。

ゲームオーバー。

頭の中の黒い背景に、白文字で表示されている。

「ごめん牧野、まってくれ。」

俺は降参を示すサインを手のひらを見せることで体現した。

間抜けな姿だ。

「明日の部活には行く。そのときまた決めるよ。俺、さっきはちょっといらいらしてたんだ。だから。」

俺は牧野から目をそらして言った。

「だからごめん、牧野」

声を低くして謝ると、あっという間に牧野の顔から血の気が引いていった。

蒸気機関車の急停止ボタンは、意外にもあっさり効いた。

「あ...そうかよ。じゃあ、明日、明日待ってるからな。」

そう言って肩をすくめた牧野を見て、俺はにやりと口角をあげた。

単純な男。

俺に背を向けた牧野を見ながら、俺は脳内で彼の悪態をつく。

--もしかして、筋肉が脳みそを食べちゃったんじゃないのか。

その場合、筋肉のほうが賢いことになるから、牧野に助言をするに違いない。

おいてまて牧野、そいつはうそをついているぞ。と。

筋肉が喋らなくて本当によかった。

そう、俺はうそをついた。

俺は去っていく牧野を尻目に、こうつぶやいた。

「誰が行くか、ばあか。」

つぶやくと同時に、俺のねじ曲がった性格に気づく素振りすら見せない牧野に無性にいらだった。

俺はひねくれている。

俺はひねくれていて、性格最悪で、どうしようもないクズ。

青春なんて、世界で一番似合わない男だ。

だから、お前みたいな青春こじらせてる奴見ると、イライラする。

青春は甘酸っぱいなんて言ったやつ誰だよ。

俺はいつか、そいつを、このどうしようもないイライラと一緒にぶん殴ってやる。

教室の黒板の上にある放送器具の音割れにかまわず、人工的な鐘は定刻通りに鳴る。

下校の合図なのか、それとも補講の合図なのか、今になると鐘の役目は俺にとってはほぼない。

筋肉の鎧をまとった卓球部部长、牧野にからまれて気分は最悪だった。

遠くで聞こえる吹奏楽部の練習音が、自分を小ばかにしているようにさえ感じた。

「へたくそ」

誰もいない渡り廊下で俺は吐き捨てる。

沈みかけた夕日が差し込んできて、靴箱周辺のほこりが無数にただよるのが目に見える。

顔をしかめながら自分の靴箱を見ると、靴がないことに気づいた。

はあ、と深いため息をつく。

またか。

まあ、これも慣れたけど。

半年前くらいから、俺は身に覚えのないいやがらせを受けていた。その主な内容が靴隠しだった。

最初は犯人を突き止めようとしたが、靴箱に隠れる自分の姿がみっともなくてすぐにやめた。

無視していればいずれ犯人も飽きるだろうと思っていたが、これがなかなか終わらない。

俺はしかたなく靴がかくしてありそうな場所を探した。

靴箱の上、女子の靴箱、掃除用具入...

ない。

今回は隠す場所を新しく変えたのか。

俺の反応が悪いから、エスカレートしているのだろうか。

全く...一体誰なんだ...

10分かけて、ようやく自分の靴を見つけ出した。

靴は傘立てに突き刺さっていた。

舌打ちをしながら校門をでると、後ろから人を呼ぶ声がした。

「タニン」

俺のことを「他人」と呼ぶやつは一人しかいない。

「タニンってば、聞こえてるでしょ？」

俺はしょうがなく、精いっぱい嫌そうな顔をして振り向いた。

「うわ、なにその嫌そうな顔。逆におもしろいんだけど。」

周りの女子から浮かないように簡単に施されたメイク。

ひらひらと動くたびに香る濃い柔軟剤匂い。

赤オレンジの夕焼けが彼女の頬を照らして、赤く染める。

「うるさい。他人って呼ぶなって言ってるだろ。」

彼女の顔を直視できなくて、つい言い方が冷たくなる。

「違う違う、他人じゃない。タニンだよ。発音が違う。他人じゃなくて、タニン。」

彼女はそう言って俺との距離をぐいと縮めた。

「一人なら一緒に帰ろ、タニン」

彼女のあざとい笑顔と目が合って、鼓動が乱れた。

彼女の名前は立花静香。両親が一生懸命考えてつけたであろうその上品な名前を裏切る、ハツラツとした女の子だ。

彼女とは一年のときからクラスがかぶって、二年間同じクラスだ。

『タニン』は、一年生のとき彼女が名付けた。

なんでも谷口をもじってタニンらしい。

「他人じゃないのにタニンって...ちやううける...!!」と当時大爆笑していた。

半年前から俺が嫌がらせを受けるようになって、立花の態度は変わらない。

俺が会話を交わす、数少ない友人の一人だった。

「部活はどうしたの？サボリ？」

部活のことをきかれ、牧野の顔を思い出す。

頭の中の牧野を追い払うように、俺は足元にあった小さな石を蹴り飛ばした。

「サボリじゃない。部活はもうやめたから。」

「え？やめた？どういうこと？」

立花が躍るように俺の前に出る。飛んでいく石の行先が気になったのか。

「どういうこともこういうこともないよ。部活をやめたから早く帰れる。そんだけのこと。」

石がポコンと軽快な音をたてて溝に落ちた。

「ええ！？そんな自分勝手にやめていいものなの!？」

勢いよく振り向いた立花から、またいい匂いがして、俺は気づかれないように冬の乾いた空気と一緒に大きく吸い込んだ。

「ちゃんと言ったよ、部長に、俺が直々にね。」

「部長って、もしかしてあの？」

「そう。あの。」

あの、牧野。

「卓球部なのに年中半そでのゴリゴリ体育会系の人!」

ぶっ、と俺は思わず吹き出した。

さすがにあのインパクト。学年では知らない人はいないということか。ただでさえ迫力マウンテンゴリラなのに、そのうえに塩顔のイメージのある卓球部というスパイスが加わることで印象に

深みがでている。

「でもあの人、簡単にはやめさせてくれなそうだけど。」

「ちょうど今日、その話をしたところ。立花の言う通り、危うくあいつの肉ダンベルになるところだった。」

俺は筋肉部長こと、牧野との会話を適当に話した。

立花は相槌をうちながら、時に手をたたいて笑って見せた。

「あはは！そりゃそうでしょ！それで？やめれたの？てか、なんでやめるのよ。」

俺は頭を掻いた。なぜやめるのか。それは難しい質問だった。

そもそも卓球部をやめることにたいして理由がなかった。

しいて言うなら、「面倒くさいから。」

俺は猫がのどをならすようにうなってみせた。

「うーん、勉強に集中したいから？」

「あ、うそついた。」

立花が意地悪く笑う。

「うそじゃねえよ！」

「うそでしょ！タニンが勉強なんて！」

立花はぴょんぴょんはねて楽しそうにしている。

たまに俺の体にぶつかって、そのたびに甘い匂いが俺を襲う。

「お、おいおいおい、俺って、そんなに勉強しないキャラだっけ？」

動揺すんなよ、俺。

「うーんとね、勉強しないキャラっていうか、ダメ男キャラ。」

「ダ、ダメ男キャラ・・・そんなに可愛げのないキャラに任命されるなんて・・・」

「そんなことないよ、可愛げあるよ。もしかしたら、ダメ人間に対して母性がはたらく人ももしかしたいるかもしれないじゃない。」

「もしかしたらすぎるよ。もしかしたらにもしかしたらが重なって、もしかしたらすぎるよ。」

俺は自分でそうツッコミながら、よく噛まずに言えたなと感心した。

「あのさ、もしかしたらさ、」

「もしかしたらはもういいって。」

「違うの！あのね、今思いついたんだけど、電話のもしもして、もしかしたらもしかしたらの略なんじゃない！？」

立花が飛んで、夕日から逃げる影が跳ねる。ゴムボールみたいに伸びては縮み、縮んでは伸びる。

「...うわ！・・・一瞬すげえって思ったけど絶対違うな！」

「ええ！そんなことないよ！じゃあ今からタニンに電話するよ？プルプル・・・」

そうやって立花は小指と親指を立てて耳に当てた。

あれ...これ、電話にできればいいのか？

ていうか、なんか古くないか？

「がちゃ、あ、はい」

「あ・・・あの・・・もしかしたらもしかしたら、タニンですか？」

もしかしたらもしかしたら、略してもしもし。

「もしもしだ！」

「もしもしでしょ!？」

いやまて。

「ってなるか!俺に電話かけといて、もしかしたらタニンですか?ってきくか。」

危うく納得するところだった。

「あっ・・・」

今気づいたというように、立花は言葉を失った。

突然静まりかえったとき、遠くの犬の遠吠えがきこえた。

「あの一、もしかしたらもしかしたらばかですか？」

「うるさい！」

立花は目を細めてにやついた。

「それで?明日筋肉部長んとこいくんでしょ?やめますっていうの？」

「ああ、それなら大丈夫。」

「大丈夫ってどういうこと？」

「俺明日、牧野のそこ行かないから。」

「はあ!?なんで!行くっていったんでしょ!？」

「いや...ほらだってさ...俺勉強があるから...」

立花はあからさまに顔をしかめた。

「さいてー。タニンはもうダメ男キャラからダメダメ男キャラに昇格だよ。」

そういいながらも、立花はなぜか笑っていた。

それにつられるように、俺もいつのまにかうすら笑みを浮かべてしまっていた。

さっきまで靴や牧野のことで最悪の気分だったはずなのに、なぜか俺の心は落ち着いていた。

どんな言葉を返そうか、と考えていると、立花が再び口を開いた。

「でも...やっぱり部活はやめないほうがいいよ...」

突然空気が重くなったような気がした。

女の表情はよく変わるとどこかで聞いたことがあるが、まさに今それを俺は実感していた。

「...」

「だって、タニンは去年から...」

「...」

俺は黙ったままだった。

立花は俺と目をそらし、ふせた。

立花がなにをいいたいのか、なんとなくわかった気がした。

この雰囲気になったときはいつもそうだからだ。

さっきまで笑いあっていたのが、うそのようだった。

俺は気づかないふりをして、立花の少し前を歩いた。

「おーい、静香！」

遠くから、立花を呼ぶ声が聞こえた。

「あ…」

立花は間の悪そうに声を漏らし、俺を見た。

「ごめんタニン、晴太くんきちゃった。また今度ね。」

「え、あ、おう。」

俺は立花を一瞥して、そっけない返事をした。

ハルタ君。立花の彼氏である。

今回はナイスタイミングだ。彼の得意分野、サッカーでいうところのファインプレー。

俺はそそくさと二人から離れた。

恋人同士の時間を邪魔するような野暮な真似はしない、と思ったわけではなく、なんとなく気まぐずだったのだ。

後ろから立花が何か言っているのが聞こえた。

「タニーン！明日はちゃんと行くんだよー！！」

立花は振り向きたくなかったので、聞こえないふりをした。

そして心の中でこう思う。

訂正。

やっぱり気分は最悪だ。

そのときグルル、とうなるような音がした。この音は犬ではなく、雷だ。

さっきまでカラカラに晴れていたというのに、もしかしたら雨でも降るのだろうか。

「最悪の日だった。」

誰もいない歩道で、そうつぶやいた。

家に帰ると、母が寝転がってテレビを見ていた。

「ん、おかえり」

「ただいま」

荷物を投げ捨てると、母はけだるそうに舌打ちをした。

「あんた、そこにお金あるから夜ご飯かってきて。」

「…」

俺は黙ってテーブルの上に置いてあった千円札をつかんだ。

母は最近、軽いうつ病のようなものにかかっている。

息子の出来が悪いから、という理由は、病の原因の一つになっているだろうか。

外にでると、すっかり暗くなってしまっていた。

玄関の灯りに、白い吐息が反射して光る。

幸い、雨は降っていないかった。

そういえば今日は...

今日はクリスマスイブだったか。

クリスマス。その響きに、胸を躍らせる日がかつてはあった。

高校二年生の冬。学校でも、家でも、俺にクリスマスを意識させる要因は何一つない。

俺には二度とサンタクロースは来ないのだろう。来たとしても、それはうちの金品を奪うブラックサンタくらいだ。

いや、この際ブラックでもなんでもいい。

誰かうちにきて、何もかもを壊してしまえばいい。

俺が夕飯を買いに家をでている間に、全てが消えてリセットされてしまえばいい。

「コンビニでチキン、売ってるかな。」

俺は特に食べたいとも思わないチキンの存在を願い、コンビニがある方向へ歩き出した。

谷川浩司の言葉で、勝負において最も戦いにくい相手というのは、岩のように、山のよう動かない人だ。というものがある。

その言葉をきいて人は、ならば自分はどうかだろうと、自分と格言を照らしあわせてみるのが普通であり、格言の良い扱いかたといえる。

俺はよくて火山岩だろう。

噴火してすぐにとびだしてしまう火山岩は、急激に冷えて見た目ばかり成長し、中身はスカスカなのだ。

まわりの気体も水も浸透して、もはや自分ではなくなる。

自分の体は一体どこにいったのだろうか。

もしかしたら今自分を形創っているのは、自分の全く知らない何かなのかもしれない。

あるいは誰かによって体の髓までそいつの思いどりに構成された人形かもしれない。

というよりも...

くだらない例えよりも前に、

今から一年よりも前に、

俺はすでに情けない人間なのかもしれない。

12月25日

雨

時間はぼんやりと過ぎた。

授業が終わり、居残り自習をする者以外は速やかに下校となる。

俺は自分の荷物をまとめると、席をあとにし教室を出た。

廊下を歩いていると、校舎が雨に打たれる音にまぎれて男の声が聞こえた。

こんな雨の中でも練習するのだろうか。野球部かサッカー一部か...

サッカー一部。

俺の脳裏に、立花の彼氏の姿がよぎる。

俺はかぶりをふって嫌なイメージを取り払った。

しかし、外の声はやまない。

よく聞こえるな...近くなのか？

それとも体育館の...

否。

体育館で思い出した。

今日は牧野と会うと約束をしていた。

昨日の一触即発の放課後の記憶をたどる。

明日はちゃんと部活に行く。

牧野の怒りを回避するためについ口走った言い訳。

これを破ればさすがにやばいと思って、明日は仕方なく行こうと、立花にはああ言ったものの、昨日決めたばかりだというのに。

すっかり忘れていて、ついのもろもり支度をしてしまった。

急いで体育館に行かねば。もしくは...

もしくは、また逃げるか。

「見つけたぞ...谷口...」

ハッとして教室の出入り口に視線を飛ばす。

そこには、息をきらしてこちらをにらむ牧野が立っていた。

さ、最悪だ...

声の正体は野球部でもサッカー一部でもない、牧野だったのだ。

「なかなか来ないからもしやと思ったんだ...」

面倒くさいことになってしまった。

誤解だ、と言いたいところだが、火に油をそそぐことになりそうだ。今さら、本当は行く気があったんだ、と言っても信じてはくれないだろう。

牧野は俺の腕を、もう逃がさんぞと言わんばかりにその骨太の腕でつかんだ。

俺は抵抗するそぶりすら見せず、あきらめたように手の力を抜いた。小学生のころよく遊んでいた遊びを思い出す。警察役と泥棒役にわかれ、警察にタッチされた泥棒は牢屋というスペースへ連れていかれる。タッチされて牢屋まで歩く時間はなんとも不服であったが、今の感情を言い表すならばまさにそんな感じだ。

昔の遊びを思い出していた俺は、あっという間に体育館に連れてこられた。

体育館の扉に近づくと、キュッキュッとシューズと摩擦力の大きい体育館の床がこすれあって鳴いているのが聞こえた。

茶色く酸化した巨大な扉を横切ると、汗とゴムを連想させる生温かい匂いがした。久しぶりで、少し体が強張る。

体育館には数十名もの生徒たちがラケットを振っていた。

「ちわーっす！」

牧野が帰ってくるのを見た後輩が、何人かあいさつをした。おそらく牧野が練習から飛び出したあとに来た生徒だろう。

牧野がかまわずに体育館の真ん中を堂々と歩いていく。すでに汗ばむほど強く握られていた手は離されてはいたが、俺には逃げる場所も隠れる場所もない。ついてこい、と語る牧野の背中を追うしかなかった。

珍しい顔があるぞ、という部員の視線が、確かめなくてもわかる。注目が体中に突き刺さって、変な汗がシャツににじむ。

俺はうつむきながら、なるべく音をたてないように歩いた。

すると牧野が、ある台で立ち止まった。

目玉だけ動かして、様子をうかがった。

「すまんお前たち。この台を少し貸してくれないか。一試合したいんだ。」

牧野は台で練習していた、後輩らしい4人組にそう言った。4人を見ると、その顔は見覚えがあった。部活が一緒なのだから当たり前かもしれないが、俺とこの下級生と一緒に活動を共にしたのはせいぜい1、2か月だろう。話した記憶もあまりないので、「見覚えがある」程度だ。下級生たちは、ういっす、と納得いかないというように低く返事をして、片づけを始めた。しかし、納得いかないというならば、俺も同じだった。

俺は牧野の方を見て尋ねた。

「もしかして試合って、俺とか？」

「そうだ。」

牧野は眉ひとつ動かさずに答えた。

そうだ。って。なんでだよ。意味わからんぞ。

「俺は卓球部をやめる話をしにきたんだ。なんで試合なんかするんだよ！」

語尾で少し声が大きくなった。イライラする。

「お前は話をしにこなかったじゃないか。俺が連れてきた。俺がお前と試合をするためにだ。別にお前と話をするためにつれてきたわけじゃない。」

「……………」

なんだそれ。

筋が通っているようないないような言い分だったが、返せる言葉も思い当たらず黙り込んでしまった。これじゃあ完全に論破されているようなもんだ。

声に出さなかったぶんの量と同じだけ、イライラがさらに積もる。

気付くと、数名で練習が行われていたテーブルはあっという間に片づけが済まされていた。

片づけを済ませた牧野の後輩の一人が、俺のすぐ横を通り過ぎた。

後輩は、俺にだけ聞こえるように、小さく舌打ちをした。

俺は目を閉じて、深呼吸をした。イライラが積もって、胃液と一緒に口から出てきてしまいそうだ。

「なあ」

俺は牧野に問いかけた。

「この試合に勝ったら、部をやめてもいいってことか？」

できるだけ嫌味ったく言っただけだったが、牧野はまるで反応しない。

問いに、牧野が答える。

「いや、どちらが勝っても部はやめていい。谷口。」

「あ？」

「この試合が終われば、俺はもうお前を追いかけたりしない。だから全力で打て。」

--だから、そういうところがむかつくんだよ。

俺はその言葉を飲み込んで、卓球台に目を落とした。

全力でうて。

よくもそんなことが堂々と言えるもんだ。控えめに言っても、牧野より俺のほうが上手い。

格上相手に向かって全力で打てなんて、言ってるで恥ずかしくないのか？

青春は甘酸っぱい。

俺にはどうしようもなく酸っぱすぎる。牧野お前、レモン絞り過ぎなんじゃないのか。

全力で打てという牧野の言葉に対し、俺は何も言わずにラケットをもった。久しぶりの感触。重量感。

俺がラケットを持ったことを確認すると、牧野がラケットをもってかまえた。相変わらずの存在感。本当に、どうして牧野は卓球をしているのか疑問に思う。卓球よりもきつと向いている競技があるはずなのに。

牧野が大きなモーションと共にサービスを入れた。

牧野はこう見えて、カットマンなのである。どこまでも裏切ってくる男である。隆々とした筋肉をフルに使ってボールを回転させて来るのだから、初めて見る人は思わず吹き出すに違いない。スピんがかかった白球が近づいてくる。

俺は軌道をじっくり見て危なげなくボールを打ち返した。

牧野の癖があった。それは、バックハンドで打った後、必ず右にステップを踏むということだ。

牧野本人はきつと気づいていないだろう。だが、はたからしばらく観察しているとすぐにわかる。

俺は部活でそのことを指摘しなかった。するほどのことでもないとおもったからだ。しかしそのことが今になって役に立つとは思わなかった。

俺は一度牧野をバックハンドに打たせ、思いっきり同方向へ打ち抜いた。牧野は脇を抜けていくボールに反応できず、先制点は俺のものとなった。

「やっぱりうまいな、谷口。」

牧野は白い歯をちらりとのぞかせて言った。

「なあ谷口、谷口はどうして卓球をやり始めたんだ？」

「は？」

突拍子もない質問に、思わず間抜けな声が出た。

「知りたいんだよ、どうして谷口が卓球を始めたのか。」

「そんなこと、覚えてないしどうでもいい。」

俺はそう吐き捨てた。

「そっか。」

牧野は再び笑った。

なんだよその反応。もしかして、自分の過去を聞いてほしいからそんなことを聞いたのか？

話の手順通りに牧野に質問するのは癪だが、少し気になる。

牧野はなぜ卓球を始めたのか。

「じゃあ、お前はなんかあったの。」

思わず尋ねた。

「おれ？俺はテレビだよ」

「テレビ？」

「こどものころテレビを見てかっこいいなと思ったから始めた。だいたいそんなもんだろ？なにかを始めるきっかけなんて。谷口だってそうはずだ。」

「・・・」

そこは普通なのかよ。

俺は心の中でつぶやいた。

余りに普通すぎて、質問したことを後悔した。一体、今の会話はなんだったんだ。

俺が黙っていると、牧野は試合を再開した。

小さな白球が宙に浮かぶ。

牧野の踏み込みでキュッと乾いた音がなった。

-- お前、卓球巧いな。

懐かしい声が、脳内で再生された。

卓球を始めたきっかけなんて本当にどうでもいい。というより、この試合が本当にどうでもいい。

-- お前、才能あるよ。

うるさい。

だん、と大袈裟に踏み込んで、俺はスマッシュを決めた。完全に牧野の重心の逆方向を突き抜けた球が、遠くで地面にぶつかって跳ねる。

「こんな試合、もうやめようぜ。」

俺はボールが跳ねるをやめて力尽きたように止まるのをぼんやりと眺めながら言った。

俺の圧勝は、目に見えていた。

お前、才能ないよ。

そう言おうとしたときだった。

牧野が替えのボールをポケットからとりだしながら言った。

「俺さ、お前の卓球が好きなんだよな。」

なぜかドキリとした。

「お前が俺のこと、暑苦しくて青春こじらせてる奴って思ってることくらいわかってる。けど、俺、お前の卓球が見れなくなるって思うとそんなことどうでもいいってなるんだ。」

お前が俺のこと、暑苦しくて青春こじらせてる奴って思ってることくらいわかってる。

まさに言い当てられた。しかも俺の方は牧野がそう思ってることを知らなかった。

冷静で客観的なのはどっちだ --？

まるで、俺の方が青春こじらせてるみたいじゃないか。

「おせっかいだっけのはわかってる。だけど、俺は卓球が好きで、それで、お前の卓球には俺が必死になるくらいの価値があるんだよ。」

やめろ。

「もう一回、考え直してくれないか。谷口。」

やめてくれ。

「また一緒に卓球しないか。」

人を見下していた俺。

あきらめない牧野。

文句を言う俺。

頼み込む牧野。

「谷口」

こんな仕打ち、ものを隠されるほうがよっぽどマシだ。

.

雨は止む気配を見せず、アスファルトにはねた雨粒が谷口の裾を濡らしていた。

俺は逃げるように体育館からでていった。尻尾をまいて逃げる負け犬。誰の目にもそう写ったに違いない。

実際そうだったので反論の余地もない。

卓球の勝ち負けではなく、人間的な意味でだ。

安いプライドが、音をたてて崩れていくのが自分でもはっきりとわかった。

大雨の中、傘をさすことも面倒になって両腕を脱力させると、あっという間に全身が濡れた。厚手の制服に雨がしみこんで、さらに重くなっていく。

何をしているんだろうか、自分は。

自分が今まで一生懸命守ってきた城は、実はハリボテだった。そう例えることができるだろうか。

小学生がかいたようなお城の絵が、雨で溶けて流されていく。

...なんか、もうどうでもよくなってきた。

「え？タニン？なにしてんの・・・？」

俺は、ゆっくりと振り返った。

声をかけてきたのは、立花だった。

「びしょびしょじゃん・・・てか、傘・・・」

傘をもっているのにびしょびしょなことが不思議に思っている様子だった。

「ねえ、どうしたの？」

俺は反応しなかった。体は立花の方を向いているものの、意識はどこか遠くへさまよっているようだった。

「ねえ・・・ねえってば！」

「あ、うん。なんだよ」

「なんだよじゃなくて、傘、なんでささないの？」

「あ、ごめん、」

俺は傘をさした。

「ごめんって・・・そうじゃなくて、なにかあったの？」

立花は心配そうに眉をひそめている。

決してかわい子ぶっている心配の仕方ではない。

本当に心の底から心配しているのがわかるし、伝わってくる。

「いや、別に」

「...うそ」

「うそじゃない」

「うそよ」

「うそじゃないって言ってんだろ！」

つい怒鳴り散らしてしまった。突然怒鳴り声をあげて、自分でもこんな声ができるんだと驚いた。

立花は驚きおびえているように見えた。

「あ、、ごめん・・・」

俺はすぐ我に返って謝った。謝罪の声はか細く、土砂降りにかき消されて立花に届いたかもわからない。

「いや・・・いいの」

声はかろうじて届いていたようで、立花は目を伏せながら返事をした。

二人の間に沈黙が流れた。雨の音がなければ、乱れた吐息が聞こえてしまったかもしれない。

「おれ、もう帰るから。」

俺は耐え切れずきりだした。

「あ、あの、タニン」

既に歩き出そうと背を向けた後だった。

「間違ってたらいいんだけど、あの、もしかしたらタニンの靴を、卓球部の人が見てるかもしれない。体育服のラインが黄色かったから後輩だと思うんだけど、あれってなに？イタズラ？」

そのとき、心臓が大きく高鳴った。

靴隠しのことだ。と俺はすぐに気づいた。

俺のことを心配しているのだろう。

だが、なにか違う。

これは俺が想像していた本来あるべき心配ではない。

俺はもしかしたら、勘違いをしていたのかもしれない。

--俺が嫌がらせを受けるようになってからも、立花は変わらず接してくれた--

もしかしたら立花は俺がいじめを受けていることを知らなかった？

もしかしたらもしかしたら...

...もしもし？俺、聞こえてますか？

立花の質問から、靴を隠していたのは卓球部の後輩だと判った。黄色のラインが入った体育服の卓球部...さっきすれ違ったとき舌打ちをしてきた、あの辺のやつらだろう。

靴を隠した犯人は卓球部の後輩・・・それ以上に、谷口にとって意外で信じられないことが判ってしまった。

逆にどうして今まで気づかなかったのか不思議なくらいだ。

立花は嫌がらせのことを知らなかった。知るよしもなかった。

立花は、俺が嫌がらせを受けていることを知っている...と思い込んでいた。

立花は俺が嫌がらせを受けていると知っていても同じように接してくれていた...はずだった。

俺がゆういつ心を許せる人であったはずだった...

頭の中が真っ白になっていく。

「ごめん、俺帰るわ」

怖い。

俺が一人で勝手に・・・

一方的に・・・

ああ。

あああああ。

最初から一人ぼっちだったんだ！

それなのに孤独が好きみたいなそぶりをして！

俺は！

なんて！

...

恥ずかしい。

それから二日間、雨に打たれたせいもあってか高熱で寝込んだ。

冬休みに入っていたので学校に連絡する必要はなかった。もとより学校があっても行っていたかわからなかったのが都合がよかった。

そして気付くと年が明けていた。

1月2日

晴れ

「行くぞ、」

普段はおっとりとした父が柄にもなくたくましい声で、俺と母を車に乗せた。

「あれからもう一年か...大変だったけど、あっという間だったな。」

「...」

終始口を開かない母と俺に、父は語ることをやめなかった。

「昔は子供二人でよく遊んでたよな。」

「...」

「勝負事でケンカになって、よく泣いてたよな。」

「...」

「毎回勝負して、兄貴が全部勝っちゃうもんだから、そりゃおもしろくないよな。」

「...」

「ああ、卓球だけは勝ったんだっけ。それで卓球始めたもんな。」

「...」

...やめろよ。

昔のことを今更語ってんじゃねえよ。

つまないんだよ。その話。

聞きたくない。

まして死んだやつ。

*

「ついたぞ。」

父はさっきと変わらぬ様子で、そう言った。

今日は1月2日。兄の命日である。

しばらく歩くと、徐々に人口密度があがっているのが分かった。

そしてすぐにその原因が、谷口家の前に現れた。

沿道に並ぶたくさんの人々。

家族、子供からお年寄りまで大勢の人が、これからやってくる選手をまっている。

兄はこの近くで事故に遭い、死んだ。

兄を待つ家族の姿が、一瞬沿道に現れ、消えた。

『まもなく、選手が通ります。沿道から体を乗り出さないでください。まもなく...』

聞き覚えのあるアナウンス。

すると、数百メートル先から歓声があがり始めた。

首位の選手がきたのだ。

波のように歓声が近づいたかと思うと、緑色のユニフォームを着た選手が、目の前をあっという間に走り抜けていった。

一位の選手が通り過ぎた後も、沿道の熱気がおさまることはなく、まもなく次の選手が現れた。

次から次へと、選手が走っていく。

辛そうな表情を浮かべながら。

今にも倒れこみそうになりながら。

...どうして？

どうしてそんなにがんばるの？

仲間が待っているから？

監督に怒られるから？

見返りがあるから？

有名になれるから？

...どうしてそんなにがんばるの？

一位にはなれないのに？

苦しいのに？

役に立たないのに？

もしかしたら

今日交通事故に遭って死ぬかもしれないのに。

兄、谷口明人は去年の今日死んだ。

両親の期待、親戚の祝福、友人の尊敬、そして俺、谷口雅の嫉妬と憧れ・・・

全てを裏切って、兄は死んだ。

あーあ。

時間の無駄。

労力の無駄。

兄さんと一緒だ。

向こうから、ひときわ大きい歓声があがった。

歓声はさっきとは異なり、なかなかこちらにやってこない。

ようやく選手の姿が見えたとき、その意味が理解できた。

その選手は今にも地面に激突しそうなほどふらふらだった。

脱水症状だった。

箱根駅伝では誰も選手に触れることができないというルールがある。沿道も関係者も、本人に届いているかもわからない励ましを送る他ないのだ。

選手が再びよろつく。

がんばれえ！と怒号がいくつもとんでいた。

昔の記憶を思い出す ー

ああまただ。

また頑張ってる。

だからなんでって。

なんで...

ねえ兄さん

ああなんで

ー 自分の生き方は本当に正しいのだろうか？

分かっていた。

自分は矮小な人間なのだ。

なんで俺はこうなってしまったんだろうか。

後悔した。

俺はいつから頑張っている人を馬鹿にするようになったのだろうか。

時間の無駄だと、労力の無駄だと、言ってしまえるようになったのだろうか。

俺はいつから勝負事から逃げるようになったのだろうか。

兄さんに負けるのは悔しかったのに、いつから負けることが当たり前になってしまったのだろうか。

どうして嘘をつくようになったのだろうか。

いじめをうけてなにもしないのだろうか。

好きな女性に素直になれないのだろうか。

なにも頑張れないのだろうか。

俺は、選手を追いかけて歩道を走った。

どうして？

どうしてそんなに頑張れるんですか？

教えてください。

どうか僕に一生懸命頑張る方法を教えてください。

夢中になって、気づけば時間がたつのも忘れて夜になって、疲れて寝ること。

誰かのことを想って溢れる言葉をぶつけること。

俺にはできないのでしょうか。

気付くと、目には涙が浮かびあつという間にあふれ出していた。

悩みが続いて、やっとの思いで友人に相談して助けてもらうこと。

母となんでもないようなことでケンカしてそれでも朝ごはんがおいてあること。

誰かに憧れて追いかけて、本当の自分の良さに気づくこと。

俺には味わえないのでしょうか。

がんばれ。

がんばれ。

あなたにはきっとそれがあるのでしよう。

俺は涙でびしょびしょに濡れた顔をぬぐうと、選手に大声で叫んでいた。

「がんばれえ...！！...がんばれえ！がんばれえ！が、がんばれ・・・がんばれ！がんばれ！がんばれ！・・・がんばれ！」

兄さんに追いつけなかった。
兄さんの走ってる姿を見れなかった。
兄さんが死ぬとき話せなかった。

「がんばれ...！がんばれ・・・！がんばれ！がんばれ...！！がんばれ！...がんばれ！！」

卓球をやりきれなかった。
一生懸命努力できなかった。
好きな人に想いを伝えられなかった。
うそばかりついた。
いじめをうけた。

悔しい。

悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい悔しい.....

「がんばれええええええ！！！！！！」

肺の空気をすべて放出すると俺は息を切らし、その場に膝をついた。

「がんばれよ・・・くそ・・・」

*

ねえねえきいてきて！！
きょうお兄ちゃんにかっただよ！
卓球だよ！児童センターで勝負したんだ！
すごくぎりぎりのたたかいでね、一点の争いをしたんだ！
デュースっておにいちゃんが言ってた！

すごかったんだよ、おにいちゃんも強かった・・・けど僕は勝ったんだ。

おにいちゃんは本気だしてたよ、おにいちゃんもそうだった！

え？うーん、そうかも。

うん、やる！

僕、卓球やる！

*

1月20日

晴れ

俺は体育館の前に立っていた。

扉にこびりつく焦げ茶色のサビの模様をいったりきたり、目がうろうろして回った。

だめだ、なぜかすごく緊張する。

俺は扉に背を向けた。

か、帰りたい・・・

深いため息をついた時だった。

「おう、谷口。」

筋肉卓球部長、牧野が背後から声をかけた。

「はいっ」

俺は慌てて返事をして、声が裏返ってしまった。

牧野はそれをきいて大声をあげて笑った。

「どうした谷口、急に呼び出されて来てみたらお前、体の調子でも悪いのか？」

「そ、そんなんじゃないですよ」

牧野は再びげらげらと笑った。

「あのさ、牧野」

「おう、なんだ？」

俺は再び目を泳がせて、言葉に詰まった。

「あの・・・」

「・・・」

じれったい俺を、牧野は少し待った。

「あんな勝手なことって本当に申し訳ないんだけどさ・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「おれ・・・」

「・・・」

「俺をもう一度、卓球部に入部させてくれないか。」

俺はそう言うとゆっくりと頭を下げた。

牧野は、今度は安心したように笑った。

「ふふ、さ、早く体育館入って着替えろ。もう練習始まるぞ。」

.

兄の死から一年と少し。

今となっては卓球を始めた理由なんて、きっとどうでもいいことなんだ。

たまにはお墓参りにでも行ってみるか。

そのころには兄はもう、俺に卓球では手も足も出ないくらい差が開いているだろう。

お墓参りに行くたびに、俺の強さに驚くんだ。

雅、お前また強くなったな！

そんな声が今にも聞こえてきそうなほど。

この季節の空気はとても澄んでいて、きれいだ。

パンティが好きだ。

おっと、失礼した。

つい想いがあふれてしまった。

突然パンティが好きだなんて言われたら、誰でも驚くだろう。

それではこれはどうだろうか。

みなさん、なにか好きなものはあるだろうか？

音楽、スポーツ、甘い食べ物、映画鑑賞...誰でも、好きなもの、趣味をもっているものだ。

もちろん僕も例外ではない。実は僕にも、前々から好きなものがある。趣味、といってもいい。

そう、みなさんと一緒である。

僕はそれに親しみと敬意をこめてこう言おう。

僕はおパンティが好きだ。

パンティ — 女性用の下着の呼び名。防寒のほかに下り物や残尿などで衣服が汚れるのを防ぐため着用される。布の面積は種類によっても異なるが、基本的に女性器から臀部、足の付け根からへその下にかけてを覆い隠す形になる。

僕の貧相な国語力では、僕の愛するおパンティの素晴らしさを、万人が理解納得させることなどとうていできないだろう。

しかしあえてその状況で魅力を伝えるとするならばまずフォルム。おパンティにはカットが浅いものやレースがついたものまでさまざまな種類が存在するが、なぜかどれもかわいらしい。ひきこまれるとでもいうのだろうか。僕はあの準三角形のような形に魅了されてしまったのだ。魔のトライアングルとはまさにこのことである。

おパンティの魅力はそれだけではない。その形だけが好きというのなら、布を三角形に切って頬をなでつければよいだけの話である。しかし、それでは全く意味がないということを僕は知っている。おパンティとは、女性が履いていてこそその真の魅力を発揮するのだ。女性のあのやわらかで白い、触れれば砂城のようにくずれさってしまいそうな肌を優しく包み込み支える。僕はそんな健気なおパンティを、涙なしには見られないのだ。

三度の飯よりおパンティ。いや、むしろ三度の飯をおパンティにお供えしたい。

赤ちゃんの健康と快適を守るおむつのように、全ての女性の健やかなる成長と共にあるおパンティ。

僕の産声はきっとおぎゃあ。ではなくおぱんてい。だったのだろう。

そう言い切れるほど、僕は唇が擦り切れるほどおパンティと口に出し、脳がとろけるほどスカートの中を、瞳がふやけるほどボトムスの中を想像しては無に還し、創造しては破壊を繰り返しているのだ。

でも実は、僕は女性が履いているおパンティを見たことがない。

家族は全員男だし、母はボクサーパンツみたいなものを履いている。

ここまで熱く語っておきながら、おパンティを見たことがないなんて、きっと誰しも笑うだろう。

だから見てみたいのだ。

僕の夢と希望があふれるおパンティ。

それをみたとき、僕は一つ成長をするのだと思う。

しかし僕は予感していた。

目を背けてきた。

おパンティを見た時、僕の夢は叶う。

そしてそれは同時に、僕の夢の終わりを表しているのだということ。

1

朝7時すぎ、僕は高校に向かう。

僕は家から高校までにある程度の距離があるという理由から自転車通学である。僕は今高校3年生であるが故に受験生でもあるから、登校時間という隙間時間もできるだけ勉強にあてたいところなのだが、自転車通学では特に何もできない。車、バス通学の方が羨ましいものである。通学時間の30分間、僕は単語も公式も覚えることができないのだ。

しかしそうと分かれば人間あっさり受け入れてしまうもので、登校時間は朝の冷たい空気を浴びてリラックスしたり妄想にふけったりと意外に有意義な時間になった。

そして今日は、先程の無礼を挽回というか弁解するために僕の身辺のことを話したいと思う。

無礼というのは、聞いてもない自分の趣味趣向言うなれば性癖を欲望の赴くままに話し垂れ流したことだ。己の名も名乗らぬまま趣味趣向言うなれば性癖を突然暴露されたらどんな心の広い人間といえど不快感を抱くことは間違いない。それもいきなり開口1番パンティが好きなど言語道断ノーパンティである。

ここまで僕は既にパンティと10回以上口にしてしまっているが日常生活ではまずパンティと言うことはない。僕ももう18歳、さすがに常識をわきまえる年齢である。所構わずパンティと発すれば連行されてしまう年齢でもある。

とはいえこんな偏った趣味趣向言うなれば性癖を持っていれば多少は苦い経験をするのは当たり前であってそれが無ければ僕は今頃社会から弾き出されているだろう。

物心がついた少しあと、小学3年生の僕は自分の趣味趣向言うなればそのときは性癖と分からずに友人にパンティの魅力を語っていた。当然のごとく僕はいじめられた。当時の僕はなぜいじめられるのか、どうしてパンティの魅力を分かってくれないのかという悔しさと歯がゆさで塞ぎ込んでしまった。

親の配慮で転校が決まり小学5年生になった僕は自分の趣味趣向が言うなれば性癖であることに気がついた。それから僕はパンティと口にすることはなくなった。

僕はなんとかしてパンティを嫌いになろうと努力した。しかしその努力はむしろ僕の妄想を掻き

立てパンティへの欲望に拍車をかけた。

小学1年生のころに母と行った下着売場。あそこに行ってさえしなければ僕の人生は変わっていただろうか。

まるで花屋のように所狭しと並ぶおパンティたちはその妖気を余すことなく漂わせ当時小学一年生だった僕を虜にした。僕はあの妖艶なおパンティたちが女性に履かれたら一体どんな表情を浮かべるのか想像しては興奮を覚えた。僕はおパンティの虜からやがては奴隷になってしまっていた。

それから1度も本物のパンティを見たこともないにも関わらず僕はパンティを想い続けた。もちろん母はこのことを知っておりゆういつの理解者でもあった。母は僕が意を決して中学生2年の自由研究のテーマをパンティにするところを必死に止めた。今となって考えると母がいなければ僕は普通に高校に通うことなどできなかつただろう。さらに言えば女子高生の下着を強奪した暁にはこれだとばかりにメディアに取り上げられお茶の間で笑いものにされたあげく容疑者として社会に汚名を馳せることだって考えられた。母のおかげもあり僕は徐々に日常と趣味を別のものとして考えることができるようになっていた。

そして今は普通の人と同じように、普通に受験生として勉強し、普通に恋もしている。僕には今、五条さんという想い人がいる。五条さんは少し物静かでとっつきづらいところもあるが話しかけてみると知的な言葉で面白おかしく返答し天使のような微笑みも見せる。僕はそのギャップに体のやや左上つまりはハートを見事に撃ち抜かれたのだ。僕は体積の少ないハートをしぼりとりこしだして生成した勇気を余すことなく使い五条さんに話しかけた。その成果、僕は五条さんとあいさつを交わしたり分からない問題を話し合ったりする仲にまでありついた。そんなわけで最近登校時間を五条さんを想いふける時間として利用していることは言うまでもない。

五条さんと今日は何を話そうか、どんな話題なら笑ってくれるだろうか、

...どんなパンティを履いているのだろうか...

僕は五条さんに対してもパンティの想いを切り離せないことに絶望し情けなくなった。五条さんを想い続け、プラトニックプラスチックな恋をしていれば忘れられると思っていた。しかし僕にはどうしても忘れることができなかつた。悪魔のようにへばりつき、天使のようにささやくおパンティ。

僕は葛藤した。

五条さんを想いながらパンティのことを考えるなんて、僕はなんて最低で卑猥、矮小な人間なんだ。しかし、パンティを忘れよう忘れようと努力するほど泥沼にハマることは幾度となく経験して既に知っている。そこで僕は考え方を変えることにした。

僕は今までおパンティを見たことがない。おパンティというのは、お店に行儀正しく陳列されているあの布のことではない。人が履いている、温もりと愛情、時には悔しさの涙がつまったパンティのことだ。僕は、それを見たことがないからここまで夢中になっているのでは？と考えた。誰しも、見えないものには夢を馳せるものである。宝くじも、地下に眠る財宝も、見えないから買うし、探す。しかし新聞紙に載る当たり番号を見れば、地下を掘り起こしてみれば、なんともあっけなく理想想像は崩れ去り跡形もなくなる。僕に関してもそれは同様のはずだ。

ならばどうするか。

見るしかない。

僕に残された道は、おパンティをじっくりと拝見し、理想と現実の差になすすべも無く淘汰されるしかない。僕は五条さんのおパンティを見るしかないのだ。もちろん五条さんを傷つけるような無粋なマネはしない。正当に順当に五条さんと誰もが認めるようなお付き合いを果たし、夕日が燃える帰り道で震えながら手を繋ぎ、最終バスを待つ停留所でじれったくキスを交わし、親のいない五条さんのかわいらしい部屋でうっとりキスをしてしかるべき時しかるべき雰囲気になってそしてようやくおパンティを拝見するのだ。

僕にはその覚悟ができていた。

おパンティと決別するために僕はおパンティを見なければならぬ。なんとも皮肉な話であろうか。被服の話なのだが。

そんなことをあれやこれやと考えているうちに学校に着いてしまった。おっと、そういえば名を名乗ることを忘れていた。また順番を間違えてしまったようだ。僕は特殊な性癖をもっているが故に誰よりも紳士でなければならない。名乗る前に趣味を語るなど言語道断ノーパンティである。

非礼を詫びると共に名乗らせてもらおうと、僕の名は下木探。下方の木とかいてしたぎ、探すと書いてさぐるである。名前と性癖の因果関係については特に僕からは何も言わないこととしよう。

2

受験生の1日とはなんとも退屈なものである。一日中机に縛り付けられ、見たことのあるようなないような問題集と睨み合う。1日が終わった頃には手足の関節がまるで粘着力の弱いボンドにくっつけられたみたいな不快感を感じる。

僕は自転車でほとんど無意識にいつもの道を進みながら、今日の薄っぺらい出来事を振り返った。休み時間のくだらない雑談や教師に当てられた時の返答以外僕はほとんど言葉を発していない。いずれの受験生もそうだろう。受験とは己との闘いだと、耳にタコができるほど言われてきたがもはや耳にタコができてそのタコと悪態のつきあいでも繰り広げたいものである。「おい、その問題AじゃなくてBじゃないのか？」とタコは僕に告げるのだ。ああでもないこうでもないと平行線をたどる議論を重ねた末、答えはCなのだ。僕とタコはそんな風にして毎日ケンカをしながらもいつの間にかかけがえのない友人になっていくのだった...

「ワンワン！」

「ぎゃあああああ！」

ファンタジックな妄想を繰り広げていた僕は走ってくる犬の存在に気づくことができなかった。僕はビックリして思わず側のガードレールに突撃した。

「ごめんなさいね～大丈夫？」

すると今度は犬の飼い主らしきおばちゃんが小走りとも言えぬゆったりとしたスピードで僕に歩み寄ってきた。僕はビックリして叫んだうえにガードレールにつっこんでしまった恥ずかしさで

なにも言うことができなかった。18歳にもなってなんという醜態だ。しかし妄想していたから余計驚いてしまったなんて言えるはずもない。

僕は自転車をもちあげ逃げるようにその場を離れようとした。犬の飼い主のおばちゃんに軽く会釈して立ち去ろうとしたときだった。僕はあることに気がついた。

おばちゃんはスカート履いていたのだ。

さっきは恥ずかしさで顔をあげることができなかったが、そんな小さな羞恥心は一瞬で吹き飛んだ。おばちゃんがフリフリのスカートを履いて散歩している姿はなかなか奇妙なものである。しかも犬の方は普通の柴犬なのだからなおさらである。これでは犬が逃げ出しても不思議はないと僕は密かに思い笑いをこらえた。

「ワンワン！」

そんな僕の考えを見透かすように柴犬は僕に再び吠えてきた。僕は柴犬を見てみたが僕に賛成して大笑いしているのかはたまた飼い主を侮辱したことを怒っているのかはよく分からなかった。僕はそれから家までの帰り道で妄想をするのはやめることにした。自転車も意外と危険な乗り物であると再確認したからだ。おかげで歩道のど真ん中ですやすやと寝ていた野良猫は轢かずにすんだのだった。

3

この日は土砂降りだった。

ここ最近こういった異常気象は多い。というのも、昨日、今日、そして明日も天気予報は快晴だったからだ。ゲリラ豪雨というやつだろうか。

僕は1度五条さんとゲリラ豪雨という話題を通じて楽しげに会話を弾ませたことがある。その日も今日のように突然のゲリラ豪雨に見舞われ、カッパを持ってきていなかった僕は外を見ながら頭を抱えていた。すると五条さんは涼しい顔で、私は折りたたみ傘があるからよかった。と女神もおののくような微笑みを見せたのだ。なんでも五条さんは折りたたみ傘が大好きで水玉模様から迷彩模様まで10色以上コレクションしているという。今日は蜘蛛の巣模様なんだよ、と自慢げに折りたたまれた傘を見せてくる五条さんに、僕はその日も心を折りたたまれてしまったのだった。

今日も五条さんはお気に入りの折りたたみ傘をさしてご機嫌になっているのだろうか...

僕は廃れたシャッター街の端にたたずむ本屋で雨宿りをしながら、そんなことを考えた。

今日は土曜日である。進学校と名乗る僕の高校では、受験生は土日も自由に学校を出入りすることができ、僕のクラスでも何人かは学校で勉強しているようだ。僕は休日にまで学校になんて行きたくないから基本家で勉強をする。もし五条さんが土日も学校に行くようであれば僕も真面目な受験生のふりをして、さあて今日もやるかな、と伸びをしながら登校するのであろうが、どうやら五条さんも土日は学校には来ないようなので仕方なく行かないというわけだ。

今日は午前中は勉強をしていて、ご飯を食べたら少し眠くなってきたし外を見れば日差しがさんと輝いていたので、散歩でもしようかなと外に出てきたしだいなのである。僕がシャッター

街の端の本屋で雨宿りしている理由が分かっただろう。

外が晴れていて、少し散歩でもしようという人がどうして傘なんて持っていくだろうか。僕は誰もいない本屋をちらりと覗きながら、じめじめとした空気にうんざりした。

しばらくまっても雨は止まなかった。どうやらゲリラというわけでもなさそうである。空には厚く黒い雲がどんより広がっており、通り雨の空によく見られる青空の隙間は全くないように思えた。僕は意を決して豪雨に飛び込むことにした。家に帰るのだから、少しくらい濡れてもいいだろう。それに、勉強ばかりで気持ちが暗くなっていたかもしれない。思い切り雨の中を駆け抜けることで日頃のストレスを発散し青春の風を感じるのも悪くはないだろう。

僕は古びた本屋をもう一度振り返った後、周りに誰もいないことを確認して全速力で駆け出した。

「いやっふうううう！！！」

なかなか気持ちいいものだった。僕は両手を広げて自分の内に秘める芸術性を解放するがごとく腕で弧を描いた。僕の歓声は豪雨にかき消され、はしゃぐ姿は雨のカーテンで覆われたように思えた。家まで校庭のトラック2、3周分はあるが、このペースならあつという間にたどりつけそうだった。

僕はつい調子に乗って、普段心の牢獄に閉じ込めている熱い気持ちを発したくなった。マリオゲームで言うところの、スーパースター状態だったのだ。僕を偏見の目で見ると世間の人たちも、スーパースターの前ではボーリングのピンのように軽く弾き飛ばされてしまうことだろう。今では家でも叫び難くなってしまったあの言葉を、僕はついに叫んだ。

「お、おパンティ！！！！」

その時だった。

突然目の前が光に包まれ何も見えなくなった。光とともに爆音が響き地面は揺れた。僕がそれを雷だと認識したのはかなり先のことだ。

神は見ていぞ、と指をさされたような気分だった。僕はその時、スーパースター状態になったマリオが調子に乗って全力疾走し、巨大な穴に落ちてゲームオーバーになった姿を思い浮かべた。

僕の目の前で真っ白な世界が広がったかと思うと、次の瞬間、僕の記憶はぷつりと途絶えた。

4

誰かが僕の首を絞めている。

僕はそう直感した。

それは手ではなく、ひも状のものだ。

苦しい。

首と胴体が引き延ばされる。

首が引っ張られる。胴体が引っ張られる。

首が引っ張られる。胴体が引っ張られる。首が引っ張られる。胴体が引っ張られる。

苦しいやめて苦しいやめて苦しいやめて苦しいやめて苦しいやめて...

僕ははっとして目を覚ました。

なんとも嫌な夢を見たものだ。首吊り自殺でもしていたのだろうか。とにかく首が苦しかった。

首と胴体が引っ張られてもちのように伸びて、あげくちぎれてしまうようなそんな夢だった。

さて、そういえば今僕は何をしているのだろうか。確か僕は勉強していて、気分転換がてら散歩をしに出かけたら突然の雨に見舞われてしまったのだ。それから僕は雨の中で...

この時点で僕は奇妙なことに気づいた。僕の頭上には雲ひとつない、心も軽やかになるような青空が広がっていた。

おかしい。

さっきまでは今日1日は止みそうにない厚雲が横たわっていたにも関わらずである。それにおかしい点は他にもいくつかあった。

僕は混乱しそうになってというか間違いなく混乱し慌てふためき、とりあえず時系列と場所、自分の状態を順に整理していこうと考えた。普段受験勉強で散々繰り返した情報整理というやつだ。国語の読解や数学の計算も分かっていることを挙げて整理整頓し少し遠目から薄目で見てみることで答えを導き出すことができる。

さて、まずはここはどこかということだ。とりあえず外であるということに間違いはない。しかし辺りを見回すとなんとはいいいのか、知っている場所なのに知らない場所というか、見たことない場所なのに懐かしい場所というか、とにかく奇妙だった。

というか、一言でいうと、低い。低空飛行なのである。

僕はさっきから考え込んでいるということもあってじっとその場から動かないという選択をとっているがそれにしても低い。現在進行系で腕立て伏せでもしていなければこんな光景は目にすることはない。

考えれば考えるほど僕は底なしの沼に足を取られるような感覚に陥った。こんなときはむしろ考えない方が正解なのではないか？僕はそう思った。

考えることを諦めかけたそのときだった。

「シバタくん、こんなところにいたの！」

それはどうやら僕にかけられたセリフのようだった。僕は藁にもすがる思いで希望をたくし声の主の方を見た。

見た瞬間僕は度肝を抜かれた。その人は巨大だった。巨人。

全長にして五メートルはあるだろうか。

く、くわれるっ！！

しかしそれは僕の勘違いであることがすぐに分かった。先程状況整理の際僕は腕立て伏せをしているという結論に至ったわけだ。腕立て伏せをしている人から見れば普通の人相対的に大きく見えて当然だ。

僕は焦る気持ちを抑え冷静であろうとした。冷静で、背筋の伸びた高校生を演じ、礼儀正しくその人にここはどこか、と尋ねようとした。

腕立て伏せをしながらである。

「ワンワン！」

しかし、そうはとんやがなんたらである。

僕は確かに尋ねたはずだった。ここはどこですか？と

ここはどこですか？

「ワンワン！」

こ...ここはどこですか？

「わ...ワンワン！」

...うそだろ！？

「...ワンンン！？」

僕はどうやら、犬になったようである。

声の主もよく見れば、先日のスカートおばさんだった。

僕は先日交通事故と思しき接触を起こした柴犬に意識が乗り移ったようである。目線が低かったのは腕立て伏せをしていたのではなく、通常姿勢をしている犬だから、というわけだ。

なるほど、僕は犬になってしまったというわけか。

うん。

全く意味がわからない。

謎が謎を読んでいるぞ！

だ、誰か弁護士を呼んでくれ！

医者か！？

わかった！救急車！

錯乱状態である。

「ほら、いくよシバタくん」

スカートおばさんは錯乱した僕の首を引っ張りそう言った。シバタくんとは僕のことだろうか。

柴犬だからシバタくんとは、単純過ぎて逆に新鮮な感じがし、どこか面白おかしいものである。

って、言ってる場合か！

今すぐ僕はこのスカートおばさんから逃げ出しそして...

そして...どうする？

逃げ出したところでどうなる？僕は今犬の姿だ。僕の知り合いもしくは家族に助けを求めたところでうんともすんとも言わずワンというだけである。煙たがられ追い払われるのがオチだ。

僕はスカートおばさんと散歩し続ける日常を思い浮かべた。

このまま犬のままだったら？シバタくんのままだったら？

考えただけでもぞっとする。

とりあえず、とりあえずだ。

「ほら、行くよ！シバタくんっ！！」

この理不尽に首を引っ張る飼い主から逃げ出さねば！

「どうしたの？具合悪いの？」

そう言って近づいてくるスカートおばさんを見て、僕はある恐ろしい可能性に気づいた。パンティを覗いてしまうという可能性である。

今まで18年間守ってきたおパンティの純潔を今ここで雲ひとつない青空のもとフリフリのスカートをはいたおばさんのパンティをみてしまったとなれば、僕は五条さんのおパンティを純粋な心で拝むことができない。

汚れ。

それは純粋なおパンティを真っ向から裏切る行為だ！

逃げる！

逃げる！

絶対逃げる！

「朝ごはんあんまり食べてなかったしなあ…」

まずい！スカートおばさん、しゃがみこむつもりか！？

しゃがみなどすればその中身など一瞬であらわになってしまうだろう。おばさんの黄ばんだパンティなど僕は命に代えても見たくなかった。

「ワン！！」

「うわっ！なに！？」

僕はスカートおばさんにひと吠えし、怯んだ隙にリードを振り切り逃げ出すことに成功した。危なかった。

僕は突然の危機を冷静に回避できた自分を褒め、これはこれでなんとかなるのではないかと安直な考えを持ち始めていた。

5

かくして僕の純潔は守られた。

僕はあと数秒で見えてしまうと思われたスカートおばさんのスカートの中身、すなわちパンティを、的確な推測と迅速な対応でかわしきったのだ。スカートおばさんには悪いが、あなたの元にシバタくんは2度と帰ってこないだろう。彼女のそばにいれば僕の純潔が木っ端微塵に碎け散るのは時間の問題である。僕は、今の自分にとってスカートが非情にも非常に危険なものと知った。

僕は犬の姿で道路脇の歩道を走っていた。犬の姿になってしまったときは頭の中が真っ白おパンティになっていたが、犬の世界というのはなかなか面白いものである。いつも通って見ているはずの景色が全く違って見えた。歩道の並木は次々と僕を通り過ぎ、車の振動が足から伝わってくるのを感じた。僕はひとときの間、犬の世界を堪能した。

しばらくして僕はゆっくり歩き始め、この状況にどう太刀打ちしていこうかと考えた。

僕は突然、犬になった。

実際それしか分かっていることがなかった。あとはスカートが不幸にも容易に見えてしまうと

いうことくらいか。

戻る方法はあるのだろうか。どうしたら戻れるのか。

そもそも僕はなぜ犬になったのか。

話しかけてくる案内人のような役割の者はいないのか。

いや、よく考えてみると僕自身が犬になったわけではない。もともと存在する柴犬に移ったのだ。僕は1度この柴犬に会って、2度も吠えられた。忘れるわけがない。

ならば僕の体はどこにあるのだろうか？

犬の体がもともと存在したものであるならば、この犬に僕は意識のみが移ったことになる。そうすると、僕の意識が抜けた僕の抜け殻がどこかにあるはずだ。考えられるとすれば僕と犬の意識が何らかの原因で入れ替わってしまったということがあるが、そうすると僕は少し困る。なんせ人間の姿をしているが中身が犬となれば、はたから見た光景がどんなものになるかは想像がつくだろう。悲惨も悲惨。目につくところを嗅ぎ廻り、尿を撒き散らす。僕はあえなく社会追放となるだろう。そうなる前に家族か知り合いがなんとかして僕の奇行を止めるべくベッドに縛り付けていることを願うばかりだが...

とにかく僕が今やるべきことは決まった。

僕の安全確認である。

僕というのは、僕の体、という意味だ。

僕はこの犬の体で僕の存在を確認しなければならない。

不思議な話である。

僕は早速、まず僕の記憶が最も新しい場所へ向かうことにした。

シャッター街の端、古びた本屋である。あそこから飛び出した直後から、僕の記憶は途絶えている。

僕は車に気をつけながら4本足でトコトコと歩道を歩いた。途中リードが邪魔になったので体に巻きつけた。

そうして僕は無事本屋にたどり着いた。しかし、辺りに僕の体がある様子はない。いつもより大きく見えること以外、日常と変わらぬ様子だった。

僕は落胆しうつむいた。

仕方ない、次は家に行ってみよう。

そう思ったときだった。

「うわあ！ワンちゃんだ！」

本屋からでてきたのは、五条さんだった。

五条さんだった。

五条さん！！！！？

僕の垂れ下がっていた尻尾は瞬時に青空を仰ぎブンブンと左右に揺れた。尻尾を振っているからか自分でも喜びが溢れて抑えきれないことがわかった。

これはやばい。

嬉しい。

嬉しい嬉しい嬉しい嬉しい嬉しい嬉しい嬉しいいいいい！！！！

犬の姿になるとこんなに嬉しさが無意識に態度に表れるなんて知らなかった。そう考えると人間は損な生き物だ。嬉しさを素直に伝えられないなんて、犬の僕からしたらなんの意味もない。

五条さんは僕のフサフサの頭を優しくなでた。

「んん？どうしてひもを体に巻きつけているの？かわいいね」

なでなでいただきましたあ！ぎいやああああ！

ひもはですねあのですね少し歩くのに邪魔になったからでしてね、まあ普通の犬なんかには思いつきもしないでしょうしかし僕は実は人間なのです。

そうだ。

僕は下木探。

僕は下木探だよ！五条さん！

「ワンワン！」

突然吠えた犬に五条さんは驚いた。

「おお！ごめんね！びっくりしたよね」

ああ、ごめんなさい、違うんです。

聞いてください五条さんあの、あの、

「じゃあねワンちゃん、はやく飼い主さんのところに帰るんだよ」

あ、まって！

「ワンワン！」

柴犬の虚しい鳴き声がシャッター街にこだました。

行ってしまった...

古びた本屋の前で切ない表情を浮かべた柴犬が一匹、そこにはいた。

いや、違う。

僕は何をしているんだ。

僕の体...

そんなものはどうでもいい。

この千載一遇のチャンスを逃すのか！下木探！

追うんだ！

次はもっとうまく甘えてみせる！

僕は当初の目的を切り捨て、目の前の欲望に身をまかせることにした。これも犬になったことが関係しているのかもしれない。

僕は走り出した。

覚悟を決意した犬。その表情はきっと、たくましいものに違いない。

まず僕は自分が犬であることを認識することだ。僕は言葉で何かを伝えることができない。態度、表情で五条さんに甘えるのだ。

出会ったら最初は寂しい気持ちを伝える。クウン？と声を漏らし、頬を足に撫で付けるのだ。優しい五条さんならどうしたの？と心配してくれるに違いない。そしてやがては僕がさっきの本屋

にいた犬だと気づき、嬉しさの笑みをこぼすだろう。そこで僕はすかさず尻尾を全力で振って喜びをアピール。その際決して吠えたりせず、じっくりと五条さんの対応をまつ。そしてご褒美のなでなでをいただくのだ。ふはははははははは。

ふはははは！

完璧だ！

そう！僕は犬！

犬が人間に甘えることは、右足を出して左足出すと歩けることくらい当然の理である。中身が人間で多少の下心をもっていることなど些細な問題だ。

どん。

鈍い音が頭に響いた。

犬も歩けば棒にあたる。

僕は電柱に頭から思い切り突撃したようだった。犬の姿になれていないせいか、はたまた素敵な妄想を繰り広げていたせいか...

僕の犬の記憶は、アナログのテレビを消したときのようにそこでぷつりと途絶えた。

6

瞬間移動した。と僕は錯覚した。

気がつく僕は商店街から少し離れた、いつも僕が通学路として自転車を走らせている道路に寝転がっていた。

ごつごつしている。だが、それが嫌だとは思わなかった。むしろお腹がぐりぐりされて気持ちよくさえ感じた。くせになりそうな快感に身を委ねるのも束の間、僕は勢いよくとびあがった。

五条さん！

危うく忘れてしまうところだった。僕は五条さんの美しい脚に頬を擦り付けるという使命天命がまちうけているのだった。

しかし不思議かな、この場所に見覚えはあるもののさっきいたはずの商店街とは少し離れている。

僕は長い尻尾を左右に揺らして頭を抱えた。

長い尻尾？

その時気付いた。僕の尻尾が伸びていたのである。僕は自由自在に動く尻尾を振り回してみた。やはり、伸びている。フサフサの巻き尻尾は細く長く思い通りに動かすことができた。

うーむ。

僕は近くに水たまりを見つけて恐る恐るのぞいてみた。そこに写ったのはかつてのパンティ好きの人間ではなく、先ほどのパンティ好きの柴犬でもなく、猫だった。灰色に茶色の毛が入り混じった雑色。

その姿は以前どこかで見たことがあった。

そうだ、毎日登下校の際に自転車で轢きそうになるあの猫だ。今度は猫になってしまったというわけか。僕は驚きはしたものの、もう叫んだり急に走り出したりパニックになったりすることはない。僕の感覚は既におかしくなっていて、なんとなく目の前の出来事を飲み込めるようになってしまっているのかもしれないと思った。いや、もしかしたらもう僕は僕でないのかもしれない。僕はあわてて淡いピンク色のパンティを思い浮かべた。

パンティ。

美しい。

よかった。

どうやら僕はパンティ好きの人間でもパンティ好きの柴犬でもないが、パンティ好きの猫ではあるようだった。

気持ちの整理がついたところで僕は五条さんに出会うべく足を動かした。

猫になったところで計画に支障はない。予定通り頬を撫で付けて甘えるだけだ。僕は再び微笑みを浮かべて僕を愛でる五条さんの表情を思い浮かべた。

ふははははは。

猫なのだから、人間に甘えるのは仕方のないことだな。本当に仕方がないなあ。

ふはははは。

僕は公園に入っていった。近道だからだ。しかし、僕はすぐにこの選択を後悔することとなる。

急がば回れとはよくいったものだ。

僕は足を止めた。

公園の中央で、4、5才くらいだろうか、小さな女の子が大口を開けて泣き喚いていた。母とはぐれたのだろうか。僕は辺りを見回したが、母親らしき人影はない。

こんな小さな女の子を公園に1人でほったらかしにするなんて、ひどい母親もいたもんだ。

僕はすぐに女の子にかけよった。放っておいてもよかったが、僕は紳士である。特殊な性癖をもったからには日常から徹底的な紳士でなければならない。それは僕が特殊な性癖をもったが故に僕自身に与えた罰でもあった。

僕は迷いなく、条件反射的に紳士であった。

泣き喚く女の子に近づくと、僕はとりあえず自分の存在をアピールすることにした。

「ニャ?。」

すると女の子がちらりと僕の方をみた。やった。

しかし女の子はすぐにまた大声で泣いた。

近くで聞くと泣き声というものはなんとも耳障りなものだ。そして不安を掻き立てられる。

僕は尻尾で彼女の顔を尻尾でくすぐってみた。だが少女は煩わしいといったように尻尾を力一杯はたいた。

いってえ!!

僕は以前猫の尻尾を踏んだことを申し訳なく思った。尻尾を攻撃されると思った以上に痛いし、なにより腹がたつ。そのうえ僕の紳士的な好意を無下にされたこともあって僕は幼い女の子に凶

らずとも敵対心を持ってしまった。

僕は湧き上がる怒りを抑えきれず、女の子に飛びかかった。18才の猫が5才の女の子に襲いかかったのだ。そこに紳士的な姿など微塵もなかった。野性の闘志をむき出しにした復讐である。

しかし飛びかかった直後女の子が突然腕を振り回し始めた。駄々をこねるとき無意識に付属してくるあの腕の回転である。猫の僕からしたらその回転はとても恐ろしく思えた。まるで発電所のタービンだ。だが僕は既に空中を舞っていて突撃を避けることはもはや不可能だと思えた。僕はなすすべもなく巻き込み事故に遭ってしまった。僕はスローモーションになる風景を眺めながら走馬灯のように道端から公園までの道のりを思い出した。猫の体は身軽で楽しかったなあ。

なんかもう、このパターンは...

僕は嫌な予感をひしひしと感じて、次の瞬間に目の前が真っ暗になった。

7

悪い予感のは的中した。

目の前には伸びきった猫が白眼をむいて倒れていた。

どうやら僕は、パンティ好きの人間ではなくパンティ好きの柴犬でもなくパンティ好きの雑色猫でもなく、パンティ好きの5歳児になってしまったようだった。

乗り移るのは動物だけではないようだ。僕は両手の平を眺めた。

人間の手は久しぶりなような気もするが、それにしても小さくて可愛いものである。僕はその小さな手で、腫れ上がった目をこすった。

ぼやけた視界が少しずつ晴れてきたとき、僕の目に飛び込んできたのは2人の男女だった。公園の入り口側の道路を伸の良さそうに会話を交わしていた。

一瞬でわかった。

穏やかな声、低めに縛ったポニーテール、細くも太くもない体格。

間違いなく五条さんだった。

仲睦まじそうな男女の1人は五条さんだったのである。

五条さん...？

僕は泣きそうになった。

誰なんだよ、その男は...

僕は自身の奥手に加えて失望したくないという気持ちから五条さんに彼氏の存在の有無を尋ねたことはなかった。だが会話をしていると五条さんにはなんとなく彼氏がないような雰囲気漂っていたし学区内でも誰かと歩く姿も見られなかった。

しかしそれも幻想だったのだと、僕の思い込みであったと言わざるを得ない。僕の目の前にはどうしようもない現実がつきつけられている。五条さんが見知らぬ男と歩いているのだ。

他校の男と付き合っていた？

僕は5秒間硬直した後、気づくと物陰に隠れていた。

5歳児の少女が木に隠れて男女を睨みつけているのである。

2人が見えなくなったとき僕は我に帰った。

そうだった。僕は今女の子の姿をしているんだ。隠れる必要もない。それに、2人で歩いていたからといって付き合っているとも限らないじゃないか。

僕はできるだけ冷静であろうとした。落ち着いて、客観的に、分析しようと心がけた。

僕は徐々に視界がぼやけていくのを感じた。

女の子が泣いているのを見て慰めようなんて僕にはまだ早かったのかもしれない。

僕はもしかして、

もしかしてだけど、泣いていた。

って泣いてる場合か！

僕ともあろうものが、こんなことでへこたれていてどうする！このままおめおめ少女の姿のまま泣いて帰ってたまるか！

少女の姿であるならば、それを最大限までいかすまでだ。犬や猫の姿で五条さんに甘えることばかり考えていたが、状況は変わった。僕の目的、それはあの男が五条さんとどんな関係であるのかを調べ、結果しだいではその関係を悪化させてやろう。少女の姿なら日本語も話すことができるし、ものも掴むことができる。卵を投げつけたり馬糞をなげつけたりするのも朝飯前だ。

僕の頭の中には、もはや自分の体の安否や魂の移動についての謎を調べようなどという考えは毛頭なかった。

嫉妬に燃え策略を練る僕の顔は、はたから見れば5歳児の少女とは思えないほどの悪に満ちていたことだろう。

僕は公園に落ちていたバケツにたぶたぶに水を入れて歩いていた。冷静に、客観的に、と言い聞かせていたあの頃の自分もういない。僕は既に結論を出していた。

五条さんと歩く男、それはやはり有無を言わず悪。並んで歩いている時点で有罪である。ギルティ、パンティ、僕が直々に紳士の鉄槌を下してやろう。だが僕の姿はどこからどう見てもいたいけな少女。不注意にも足を絡ませて両手のいっぱいバケツを不幸にも男にぶちまけても、不思議かな、仕方のないことである。

僕は慎重に五条さんと男に近づいていった。

それにしても5歳児の体というものは本当に歩きづらい。冗談にしくなくても足がからまってこけてしまいそうだった。バケツも欲張って水を入れてしまったせいで、重い水をはねるわで散々である。

「うん？何してるのかな？」

あ。

しまった。

バケツと歩きづらさに気を取られて、男に気づかれてしまった。僕はその場で再び固まってしまった。なんと説明すればいいのか。5歳児の少女とはいえ、公園から1人で水がたんまり入ったバケツを抱えて歩道を歩いているというのは、よく考えてみれば奇妙だ。

冷や汗が脇を伝っていくのを感じた。

「ま、迷子...」

苦し紛れの言い訳。

さらに話がこじれそうだ。

「ええ、迷子なの？お母さんとはぐれちゃった？」

男が図々しく聞いてくる。

この野郎、初対面の人に向かって馴れ馴れしい態度だ。

「何才なの？」

「...ご、ごさい」

否、18歳である。

「うわあ！かわいい！迷子？探してあげようよ！」

五条さんも僕の存在に気付き、話しかけてきた。ええい。こうなったら強行手段だ！

僕は力一杯バケツを持ち上げ男に投げつけようとした。

くらえ！紳士の鉄槌だ！

が、バケツを持ち上げた途端バケツはくるりと半回転し、中身の水は僕の頭から足にかけての世界旅行を果たした。要するに僕は、2人の男女の前で盛大に水を浴びた。

まぬけ...

まぬけ...

まぬけ...

そんな声が遠くから僕の頭に語りかけてきたような気がした。

2人は最初驚いていたが、すぐに僕を心配して、終いには家が近いから着替えに行こうなどと言い出した。僕は自分の間抜けさにあっけにとられたまま、言われるがままに五条さんの家に行くこととなった。

僕は狼狽した。

図らずとも五条さんの家に入る事となってしまったのだ。男も一緒だというのが気に入くないところであるが。

僕は恐る恐る玄関をあがった。いい香りがする。女の子の匂いだ。

「じゃあ、お風呂入ろっか。」

え？

「よく見たら泥だらけだし、お風呂に入って、それからお母さん探そ！」

そう言って、彼女は天使のような笑顔をみせた。いや、もはや天使。

っていやいやいやいや！

お風呂！？

お風呂って裸になるやつ！？

あの、服が全部なくなるやつ！？

「ほら、ばんざーい」

「ば、ばんざーい」

万歳iiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！！！！！！！

僕は極めて冷静沈着かつ紳士的にこの状況を把握してみたがどう考えてもこれは五条さんとお風呂に入るというドッキリウッキリボッキリな展開ではないか。いやまて。まてまてまてまて。こんなことは普通はありえない。僕が少女の姿をしているという理由からこんなことになってしまったのだ。これは僕の力ではない。つまり、紳士的ではない。僕はこのイベントを避けるべきだ。避けて、きれいな体ときれいな瞳で五条さんと恋に落ちるんだ。

ところがどっこいひょうたんおパンティ。

僕は偶然とはいえこの絶好のおパンティを謁見するチャンスに出会えたのだ。偶機。好機。五条さんとの今後の進展に諦めたわけではないが、神が与えた人生で最後の五条さんのおパンティイベントかもしれない。僕はこの機会を逃したら永遠に、五条さんのおパンティを見れないかもしれないのだ。

五条さん、

おパンティ、

五条さん、

おパンティ、

五条さんおパンティ五条さんおパンティ五条さんおパンティ五条さんおパンティいいいい！！！！！！

落ち着けえ！

僕は特殊な性癖を持っているが故に誰よりも紳士でなければならないハズウ！

誰よりも好きな五条さんを前におパンティを頭にチラつかせるなど言語道断ノーパンティ！ノーパンティ...

僕は誰よりも五条さんを好きであるが故に五条さんのおパンティを見たい！

この際少女の姿のままでも五条さんのおパンティを見れることは本望なのではないか！？少女の姿なら僕、下木探のイメージなど正にも負にも働かず僕が墓場まで秘密を持っていけば誰にもバレることはない。五条さんのおパンティ模様とその色も墓場までもっていく自信はある。それなら気兼ねなく今後も関係を保つことができるのではないか...？

僕は...

僕は...五条さん...

僕はびしょびしょに濡れた肌着を脱いだ。

「ありがとう！お姉さん！」

こんな僕を許して下さい。

8

ああ神よ。

パンティの神おパンティヌウスよ。

我が愚行をお許し下さい。私が悪かったです。少女の体になったことをいいことに五条さんのおパンティを道理にそぐわぬ形で見ようとした私が悪いのです。だからそんなにお怒りにならない

で下さい。これからは毎日欠かさず82粒の米をお供えし、日が沈む頃に就寝し日が昇る頃に起床し、肉のない朝食を食べた後に拭き掃除をし、拝むことを忘れないと誓います。

僕はパンティ神、おパンティヌスの怒りに触れたようであった。

僕は気づくと五条さんの目の前ではなく、五条さん宅のリビングへ移動していた。しかしここでは移動という言葉は適切ではない。

精神が移動した。

乗り移った。

僕は今日のうちに何度も精神移動を繰り返してきたが、今回の体は今までとは勝手が違うようだった。

まず、哺乳類ではない。

視界は遠くの方からよく見え、望遠鏡を常に覗いているような感覚だ。

しかも見える風景は1つではなくモニター室で監視を行うかのようにたくさんの映像が一気に見える。最初は何がなんだかわからなかったか、目が見えないというわけではないので、落ち着いてよく見てみるとどうやらここは五条さん宅のリビングらしいことがわかったというわけだ。先ほどの男が座ってテレビを見ていたからだ。

くつろぎすぎじゃね！？

と僕は思ったがどうやら声は発せないようだ。僕は自分が一体何に乗り移ったのかイマイチ確信が持てなかったが、家の壁を這っていても気づかれない、もしくは気づかれても放っておかれるような生物ならばある程度は絞ることができる。

おおかたゴキブリか蜘蛛、最悪ノミかダニといったところか...？

まあそんなことはどうでもいい。僕は今世紀最大のチャンスを逃した...

いや、違うな...試されていたのかもしれない。五条さんおパンティを自分の力で拝見すると豪語しておきながら卑怯な手を使ってしまったことでパンティの神を怒らせてしまったのだ。おかげで僕はこんな無力な体にされてしまった...

いや、無力と吐き捨てるのは早慶か。この体なら、閉まったドアも誰にも気づかれず通り抜けることができる。

僕は精神を集中させた。2つほど壁をまたいだ先に、シャワーの音が聞こえてくる。どうやらこの生物は足に聴覚があるようだった。足に振動が伝わり、音がなんとなく判断できた。

僕はリビングの扉の隙間を壁沿いに通り抜け、廊下の天井を這って洗面所までたどり着いた。一枚扉の向こうに、五条さんと少女が2人でシャワーを浴びているのが音で分かった。だが、僕はシャワールームに入る気などさらさらしない。僕は五条さんに申し訳ないことをした。五条さんに合わせる顔がない。

最初から僕なんかに、彼女のおパンティを見るどころか、お付き合いをする資格すらなかったのだ。僕は最低な人間だ。この体になったのも悪くはない。反省するにはいい機会だ。僕はきつともう、人間の体に戻ることもないのだ。

「ねえ、愛ちゃんは好きな人はいる？」

どくん。

心臓が大きく高鳴る。

びっくりした。

五条さんが少女にきいたんだ。

「うん、さとしくんがすき。」

少女はそう答えた。

「お姉ちゃんは？」

どくん。

「うん？いるよ。」

え...

「同じクラスの人でね、毎日会うし、たまに勉強の教え合いっこもしたりするんだよ。」

どくん。

いやまさか...そんな、都合よく...

「その人の名前はね...」

どくん。

どくん。

僕なんか、好きな人とおパンティを秤にかけてしまうどうしようもない人間だけど...

...でも...もし...

どくん。

その言葉を聞いたなら...！

どくん。

9

「.....る！」

「.....ぐる！」

「さぐる！！さぐるってば！わかる！？」

「お母さんよ！」

「さぐる！」

「さぐる！」

お母さん。

お母さんがいる。

頭が痛い。

「痛い...」

「さぐる！！」

突然、僕は母に抱きしめられた。

苦しい。

「心配した…。生きてて、よかった…。」

お母さん。

お母さんが泣いている。

なんとなく、懐かしい感じがして、僕は涙を流した。

10

「ええ！？雷に打たれて、二日間もずっと寝てた！？」

五条さんは細い眉を釣り上げてあっと驚いてみせた。

僕は月曜日の帰り道、五条さんを誘って2人で下校していた。

昨日の日曜日、僕は病室で目を覚ました。母や医者曰く、僕は金曜日に近くの本屋近くで、雷に直接打たれたわけではないが、近くに落ちた雷で感電し二日間意識不明だったという。僕は雷に打たれたことを全く覚えていなかったのだから、記憶障害の可能性を疑われたがその後の検査では特に異常もなく、体の損傷も見られなかったのだからその日のうちに退院となったのだ。翌日には学校に行けるほど体力も回復し、今日も1日の授業を終えたところである。

「急に一緒に帰ろうって言われてびっくりしたけど、そんなことがあったんだ…」

「ごめん、急に誘われたら驚くよね。」

「全然気にしなくていいよ！…あ、そういえばね、私も土曜日おかしなことがあったよ」

「おかしなこと？」

「小さな女の子がね、愛ちゃんっていう子なんだけど、迷子になってたの。それでお母さん探そうか？って言ったら急に持ってたバケツをひっくり返してびしょびしょになっちゃったの！」

「え？なにそれ。」

彼女の不思議な話にも、僕は思わず吹き出した。

彼女の少し天然めいたところも、僕はとても好きだった。

五条さんはびしょびしょ少女を家に連れて行き服を着替えさせて無事母親のもとに返したという。その時たまたま従兄弟がいて助かったと、五条さんはまた笑った。

僕は彼女の話に心から笑うことができた。笑って、温かい気持ちになることができた。

「あの、五条さん」

僕が呼ぶと、彼女はん？と言って立ち止まった。

「僕、五条さんのことが…好きです。」

聞こえてしまうんじゃないか、と思うくらい鼓動が高鳴った。

五条さんは最初え、と声を漏らしてそれから驚き、照れ、笑いといった様々な表情を四季のように彩り豊かに変えてみせた。

返答までの数十秒がとてつもなく長く感じられた。

「えっと...またびっくりしちゃった。今日はなんか、さぐるくんいつもと違う感じがする。」

「そうかな...」

「ありがとう。とても嬉しい。」

五条さんは微笑んでいった。天使か。

「でも今ちょっとびっくりしちゃって、頭の整理がつかないの。何日か、時間もらってもいいかな？」

「...わかった。」

僕たちはそこで別れることになった。

五条さんが別れ際、僕に手を振った。

僕はできるだけスマートに、紳士に手を振り返した。

その時、ふいに強風が吹いて、僕と五条さんの股下を駆け抜けた。

薄いポリエステル製の制服のスカートは、いとも簡単に空を仰いだ。

スカートがめくれた。

僕の目の前で。

スカートに隠れたおパンティが、僕の目の前で露わになった。

「うわあ！！！」

頬を真っ赤に染めた五条さんは舞い上がったスカートを抑えて叫んだ。

「み、みた！？」

僕はあわてる彼女に対して極めて紳士な態度でこう言った。

「いや、なにも見てないよ。じゃあね、また明日。」

僕はおパンティが好きだ。五条さんのおパンティも見たい。けど、なんでかな。

今はまだおパンティが見れなくても、気分はすごく晴れやかなんだ。

6月

雨水が染み込んだジャージはびったりと皮膚に張り付き、まるで突然見覚えのない脂肪が身体中にしがみついているような感覚に陥った。

容赦無く振り付ける雨水とアスファルトに跳ねる水滴は俺の靴と靴下を水浸しににして、歩くたびにぐちょくちょと泡をたてる。

俺は雨を凌ぐための道具である傘を持っていなかった。

そのため家から歩いて10分ほどの”辰野子橋”に着く頃には、前髪から水滴が滴り落ちて口に滑り込むほど頭がびしょびしょになっていた。

目的地も決めずにここまでとりあえず来て見たが、濡れるとこの季節だとはいえやはり少し寒い。反射でぶるりと体を震わせた俺は、この橋で折り返して家に戻ることを決意した。

辰野子橋はアーチ状の支えがつくいわゆるアーチ橋という形状で、車は通行禁止だが幅は比較的広く、人が両手を広げても5人は簡単に入る程だ。高さは目算で10メートル程だろうか。下を覗くと雨で増水した濁り色の川が、水同士が競うようにもみくちゃに流れている。

ここから飛び降りたら死ぬのだろうか。

そんな考えが頭をよぎった。

落ちた衝撃で死ぬことはないと思うが、この水量だ。溺死は免れまい。

滝を逆さまから見ているような濁流に

為すすべもなく吸い込まれる自分の姿を想像して、俺は唾を飲んだ。

もう帰ろうとしたときふと、人の気配がして、俺は濁流から目を移した。

アーチの山を越えた先に、確かに誰かがいた。

髪が長い。女性だろうか。

彼女もまた、俺と同じで傘をさしていなかった。

こんな大雨だというのに傘もささずになにをしているのだろうか。

という自問自答とも思える疑問を彼女に抱き、様子を伺った。

髪の長い女性は俺に気づく様子はなく、下の川を見つめている。胸の高さにある手すりに両手を添えて覗き込むように首を伸ばしている。

その様子はどこか寂しげで、震えているようにも見えた。遠くで瞳は見えなかったが、彼女はまるで催眠にかけられたかのように、目下の濁流に魅入られたかのように眺めていた。

ここから飛び降りたら死ぬのだろうか。

そんな疑問が、彼女から滲み出しているような気がした。

「あ...！」

俺は思わず声を漏らした。

彼女が漂わせる哀愁は、俺をひどく焦燥させた。

もしかして、自殺する気じゃないだろうか！？

俺はあたふたと周りを見回した。

中途半端に伸びた前髪が、水滴を撒き散らす。

何も入っていないと分かっているながら、左右とお尻のポケットをまさぐった。携帯が入っていないことなど知っていたはずなのに、ポケットが空だという事実には絶望した。

しかし、たとえポケットに携帯が入っていても携帯など役に立つはずがない。なぜなら目の前の女性が今にも荒れ狂う波に飛び込もうとしているのだ。助けを待っている暇などあるはずがなかった。

彼女を救うなら今、他でもない自分自身が止めなければならない。

自殺なんてバカな真似、してはいけないと説得しなければならない。あるいは無理矢理にでも女性を橋から引きずりだして冷静になるまで捕まえておくか。

どちらにせよ時間はない。

「あの...！」

俺は意を決して叫んだ。勢い余って声が裏返ってしまったが、雨の雑音に紛れて飛んでいった一声はどうやら女性の耳に届いて届いたらしい。

女性は首をこちらに向けて俺の存在に気づいた。その表情は雨による視界不良と距離が若干遠いことからなかなか読み取ることができない。

俺はその場から動けなかった。今年で年齢27歳の俺は、生まれて初めての自殺現場に遭遇して足を動かすことができなかった。女性を自殺から救うために駆け寄り、多少荒くはなってしまうが橋から女性を引き剥がし自殺を止める。子供が好きなスーパーヒーローのようにとっさに動いて人を助けることをイメージするのは簡単で、十代の頃は困っている人を助けられる自信もあった。しかし、大人になって教養も力も子どもの頃より増したはずの現在、物語の主人公のようにさっそうと動くヒーローの姿はない。そこには、夢を無くし職を無くし、ずぶ濡れになったジャージ姿の自分がいるだけだった。

「あ...！あの！はやまっちゃいけない！死ぬことだけは！...死ぬことだけはいけない！つらいことがあったかもしれないけれど、悪いことが...俺はその、会社が潰れて今仕事がないんだ！それで...実家の農家を継ぐことにしたんだけど...！」

俺は思いつく言葉を整理もせずに叫んだ。

女性の自殺を止めようとする説得内容が自分の失職だなんて、いつから俺はこんなにお人好しになってしまったのだろうか。

でもこの時の俺は失職直後で'自殺'という単語が頭をかすめることもしばしばあった。視界が悪いとはいえ、彼女は少なくとも俺よりは若く見えた。これから色々なことがあって、きっと今が思い出話になる日が来る。だから俺は未熟な大人なりに、こうしてちぐはぐな文脈で彼女を説得しようとしている。

「とにかく、そこから離れる！」

口に溜まっていた雨水が顔の前で霧状になって飛び出した。唾液と雨水が入り混じった液体は雨と重力に押し引っ張られ、俺と彼女の隔てを無くした。

つらいこと...

彼女がそう言った気がした。

「あなた、私が見えるんですか？」

彼女の第一声はそれだった。

6月4日

「ハア...ハア...ハア...！」

ぐちょくちょと、靴が泡を吹く。一瞬強い風が吹いて俺は体をよろめかせた。

「ハア...ハア...ハア！」

滑りやすそうな鼠色の排水溝を避けながら、茶色いアパートを視界に入れる。

そういえば洗濯物中に入れてなかった、と自分の家のベランダがチラリと頭をかすめた後、階段を登り始める。

「ハア...ハア...ハア...！」

こんなに一生懸命走ったのはいつぶりだろうか。階段にたまる雨水を踏み潰しながら、俺は簡単な計算をした。

7年。

俺が運動をやめてからそのくらいの月日が経つ。以前の感覚で走っていた俺は、階段を登りきる頃には酸素不足で喉がヒューヒュー鳴っていた。ふくらはぎがパンパンに膨らんで悲鳴をあげている。

俺は鍵のかかっていない扉を勢いよく開けた。

とりあえず、風呂に入ろう。

蛇口を一捻りすると、水が勢いよく飛び出した。お湯になるまで少し待ったあと、出て来るお湯を桶にためて頭からかぶる。

温かい。

冷えた体を慰めるようにお湯をかける。徐々に湯船が溜まっていく様子をぼんやり眺めながら、先ほどの出来事を思い出した。

「あなた、私が見えるんですか!？」

そう言った彼女は、まるで新しいおもちゃに興味を移したかのように川から目を離しこちらに近づいてきた。

「今まで誰も気づいてくれなくて...あ、その前に、私、自殺志願者じゃないですから。安心してください。」

ふひひ、と彼女は笑った。

真っ黒で腰まで伸びた綺麗な髪。パステルカラーをベースにしたワンピースには大きく開いたマーガレットがプリントされている。淡いピンクのスニーカーが彼女が20代前後であることを容易に想像させた。

「え、それは、すみません、」

俺はなんとなくあやまった。勘違いでとんでもないことを口走ってしまった。俺は恥ずかしさで彼女の目を直視できなかった。

橋に立ってただけで、自殺なんて考えていなかったのか。おせっかいどころか、変人じゃないか、俺は。

必死の形相で説得を行う自分を想像して、ぶつけようのない心のもやもやを振り払うように、頭を掻きむしった。

しかしなぜこんなところで...

俺は再び先の疑問に戻る。それに、なにかぬぐい切れない違和感を感じた。

違和感の答えを完結に提示したのは、他ならぬ彼女本人だった。

「だって私、もう死んでますから。」

俺が結論をだすよりも早く、彼女は常識はずれのことを言った。俺の開いた口に、ここぞとばかりに雨水が浸入してくる。

モウシンデマスカラ？

もうしんでますから？

もう、死んでますから！？

言葉を理解するのに、五秒はかかった。

受け入れたとまではいかないが言葉の理解をした後、違和感の正体がじわじわと沸き上がり、その姿を現し始めた。

雨水は平等に人を濡らすはずだった。中途半端に伸びた前髪も、刺繍が入ったたくたくたのジャージも、履き慣れた運動靴も、横殴りの雨にさらされて湿度100パーセントである。ぐしょぐしょである。

当たり前だ。傘をさしてないのだから。傘をささない人は濡れる。カッパを着てる人だって、防水のコートを着てる人だって、傘をささなければ雨に打たれていることに変わりはない。

摩訶不思議。

彼女の長い黒髪も、花柄のワンピースも、ピンクのスニーカーも、水一滴慕っていない。湿度0パーセント。

さらさらの髪の毛が、さらさらのワンピースが、まるでアイロンにあてた直後みたいに、大雨に煽られてなびいている。

奇妙。異質と言わざるを得ない。

彼女は濡れていなかった。この大雨の中で、滴一滴さえ落としていなかった。

彼女はこの空間に適した存在ではない。

俺はそう確信した。

ふひひ、と彼女は笑って、手すりに手をかけた。

「ほら！」

混乱する俺にさらに追い打ちをかけるように、彼女はありえない行動にでた。

俺は信じられない光景を目の当たりにした。彼女は目の前で勢いよく足を振り上げ、橋から乗り出した。その動きがスローモーションとなって俺の目に映ったかと思えば、次の瞬間には彼女は目の前から消えた。

落ちた。

笑いながら落ちていった。

下の濁流に人が飛び降りた。

「ほら！」

雨の中で聞いたとは思えないほどの澄んだ黄色い声が、背後から聞こえた。

振り向くと、橋から飛び降りたはずの彼女がいて、ふひひ、と笑った。

一体、なにがどうなってるんだ。

目の前の現象に未熟な頭でついていけるはずもなく、俺は逃げだすしかなかった。

6月6日

店中の会話が入り混じったがやがやという音を煩わしそうに、俺は空中に覚えたてのタバコ煙をくゆらせた。ただよう白煙を目で追いかけながら、先程店員が運んだ白子天ぷらを眺める。もこもこと揚がった白子に軽く塩をふりながら目の前の男が口を開いた。

「幽霊ですか、面白いですね」

俺は泡がはじけて無くなったビールを喉に流し込みながら、春ワンピースの女の顔を思い浮かべた。

「お前、疑わないのか？」

「僕は情報には真摯に向き合うタイプの人ですよ。」

紳士ですから、そう言って探ははにかんだ。

下木探は、大学2年生の時に知り合った友人で、年は一つ下だが今でもこうしてたまに飲みに行く仲である。

今回は俺の会社が倒産したことを知った探が、失職祝いという不謹慎な名目で飲みを誘ってきたのだった。

探は少々生意気なところもあるが、腹がたつということはない。持ち上げ上手というか、煽り上手というか、相手にどんなことを言えば心地よいのか分かっている。それもたくさんの人に対してだ。コミュニケーション力が高いというものだろう。それを裏付けるように、探は大学では軽い有名人だった。どのサークルにも属しどのサークルにも属さない、座敷ワラシのような存在だ

ったが、誰とも仲がよく、現れると誰もが喜んだ。

大学から始めていたというライター活動を、探は今や仕事としている。検索すれば名前も引っかかるほどの期待の新人ライターだそうだ。

今回俺が探に先日の女の話をする、探は口角をあげて目の奥の光をらんらんと躍らせ始めた。

「ハルさんって靈感あったんですか？」

「いや、全く無い。」

少なくとも今までは。

「でも、彼女は目の前で橋から飛び降りて、次の瞬間には後ろにいたんだ。ありえないだろ？錯覚じゃない。しかも、彼女は濡れてなかったんだ。降っていた雨がすり抜けるというか、避けていくというか、通りすぎるといふか...とにかく異常だった。例えるなら...うーん、...神社の中でエレキギターを持ったバンドマンが1人で立っているみたいな」

「無理に例えないでください、余計分かんなくなりますよ。」

探はそう言いながら白子の天ぷらを俺の取り皿に箸で移した。

塩はお好みで、と探が取り皿の横に塩を置く。いちいち気の利くやつだ。

「しかしハルさん、聞いた限りだとその女性の方が幽霊だと認識した途端、ハルさん逃げ出しちゃったんですか？悲鳴をあげて。」

「悲鳴はあげとらんわ。キャー！って言うか。キャーって。27歳だぞ。」

「27歳なんて若いですよ。青い青い。オールブルーです。」

探は親指を立てた。オールグリーンにかけているのだろうか。

「お前は26だろうが。まあ、でも逃げたよ。あの時は倒産直後で気も滅入ってたし。それも、大雨の中傘もささないほどにな。そんなときだったんだ。もしかしたら女も疲れから見える幻だったのかもな。」

幻だった。

そう思いこみたかった。

すうっと呼吸をすると、口内に残っていた煙が鼻から漏れた。

ジョッキが汗を流したのを見て、なんとなく親指で拭く。

探が俺に目配せをした。

俺は生で、と言うと、探は店員を引き止めて追加の生ビールを二杯頼んだ。

ガチャガチャとした店内は休むことなく動き続けている。

「会ってみたいですね、その彼女。」

俺は思わずえ、と声を漏らした。

「だから幻だったかもって。」

「幻じゃなかったかもしれません。言ったでしょう？僕、情報には真摯に向き合うんですよ。もしその話が本当なら、幽霊に取材ができるかもしれません。」

「幽霊に取材って...」

吹き出してしまいそうだったが、同時に探のライターとしての熱意と才能を感じさせられた。確かに幽霊に質問してみました、なんて見出しがあれば誰だって気になる。

しかし、そんな記事誰が信じるんだ？世間に叩かれて、恥をかくだけじゃないのか？

「そんな記事かいてなんの役に立つんだ？って思ってますか？」

ドキッとしてしまった。凶星だったからだ。

「取材しても、記事に使うとは限りません。むしろ使わないことの方が多いくらいです。でも僕は無駄足にこそ意味があると思うんです。自分に必要だと思うネタだけ探していても、自分の才能以上の記事はかけません。予想外の出来事、ネタ、情報が才能を伸ばすと思うんですよ。つまりは無駄こそ努力です。」

探は店員が持ってきた溢れそうなビールを受け取ったかと思うと半分まで一気に減らしてみせた。顔が少し赤い。目も少しとろけてきた。

仕事についてこれだけ熱く語り始めたのだ。酔っ払っているのだろう。

いらっしゃいませ！と元気なバイトの声が聞こえた。

俺は顔がゆでだこのように赤くなった探を見て、夢を追いかける探を羨ましく思った。

俺は横切る店員を止めて、さらに追加のビールを二杯頼んだ。

生2でしたあ！とまたバイトの声。

「わかったよ、お前の熱意が伝わってきた。お前の取材、協力するよ」

「本当ですか！ありがとうございます！」

探は本当に嬉しそうな顔でそう言った。この裏表のなさそうな笑顔が、きっと探の魅力であり才能なのだと思えて感じる。

探は勢いよく唐揚げを頬張った。揚げたての唐揚げが探の口の中で砕かれてサクサクと心地よい音を出す。

うまい！と探はまた笑った。

「じゃあ次空いてる日に、一緒に辰野子橋に行ってみようか。」

一昨日ふらっと行った辰野子橋。普段は行くことがないから馴染みがあるというわけではないが、その情景ははっきりと脳裏に焼き付いている。

その風景には、長い髪を揺らした美しい女が橋の隅に立っている。

その細い背中を見るとどこか寂しげな感情が見え隠れして、ふと声をかけたくなくなってしまふ。

「はい！と言いたいのはやまやまなんですけれど、実は僕このところ仕事がたてこんでまして明日からしばらく休みがとれないんです。それで...」

探は申し訳なさそうに俺をみた。上目遣いを駆使してくる。26の男が上目遣いなんかするな。

「だからハルさん、その幽霊さん、連れてきてくれませんか？」

「は？」

「日付と場所は後ほど連絡します。ですからそれまでに幽霊さんと仲良くなって、一緒にデートがてらその場所に来てくださいよ。」

「い、いきなりそんなこと言われても...」

俺は狼狽した。助けを求めてビールに手を伸ばす。

彼女と仲良くなる？

全く予想してない未来だった。

てっきり探を橋まで連れていったら俺はそこでお役御免かと思っていたのだが。

「僕は大丈夫だと思いますよ。ハルさん。6月いっぱいには今の家いるんでしょう？もちろん取材が上手くいけばそれなりの報酬も支払います。女性とデートできてお金も手に入るなんて、ハルさんにとって悪いことではないでしょう？」

探はべらべらと俺を納得させるような御託を並べた。しかし御託といってもその内容は筋が通っていてとても魅力的だ。この時点、俺が探の提案を魅力的だと感じた時点で俺は敗北している。断る理由が無いとまで頭で思ってしまった。

こいつは本当に酔っ払っているのだろうか。酔っ払っているふりをしているだけか？

それとも、俺が酔っ払っているのだろうか。一昨日の雨の日の時点から、俺の方が酔っ払っているのだろうか。

俺は素直に頷くのが嫌で、ほんの少しでもいいから探に抵抗しようとした。

「女性とデートつってもな、幽霊だぞ...おばけなんだぞ...？」

「OBK、略してOK、問題ありませんね、大丈夫です、ハルさんイケメンですから。」

適当なことってんなよこいつは。

「うーん、...」

「何を渋っているんですかハルさん！高校時代はヤリチンを文字ってハルチンというあだ名がつけられるほど女癖が悪かったそうじゃないですか」

渋っているというか、お前の思い通りにとんとん拍子で話が進むのが嫌なだけだ。

っていうか、

「お前そのあだ名どこで聞いたんだよ！高校違うだろ！」

渋っていたら、過去の闇を引っ張り出された。悪魔か。

「僕の顔の広さをなめないでください。拳10コ分くらいはありますよ。」

「だいたいそんなもんだろうが、しかし、ハルチンという単語は久しぶりに聞いたな。あの頃はちょっとマセてたんだ」

「マセてましたか。」

「...」

「...」

今、もしかして韻的な感じで上手いこと言おうとしてた？

気づくと、いつの間にか探のビールは空っぽになっていた。

再び顔を真っ赤にさせた探は、にんまりと気持ちよさそうに唇を曲げた。

6月8日

雫がベランダの柵を打ち付ける音で目を覚ました。昨日干しておいた洗濯物のタオルが半分濡れ

て色が変わっている。

まぶたをこすりながら窓の鍵を下ろして開けると、じめっとした空気が隙間をかきわけるように滑り込んできた。

雨。

6月は嫌いだ。今はもうやめてしまった仕事の通勤の面倒臭さも、外に干していた洗濯物も、靴下が臭うのも、全部6月が悪い。

Tシャツは暑くて肌にくっついてくるし、野菜も腐る。

こんな日はまたいつかのように傘も放り投げてどこかへ行きたいものだ。

だが今は先日と違って、雨に濡れた後の洗濯や風邪などのリスクを考えて実行には移さない。

俺は大きな人生の深呼吸をして、実家の農家の手伝いを受けることを受け入れた。

このジメジメとした6月が終われば、荷物をまとめてこの家から出て行く。

この湿気った家にも、この妙に冷たい町ともおさらば、帰ってくることはないだろう。

歯を丁寧に磨いて、服を着替え、適当に髪を整えて俺は扉を開けた。

行先は決まっていた。例の辰野子橋である。

俺って、もしかしてバカなのかな。

ひねった鍵が、心地よいロックを響かせた。

どうせ暇だから。

適当な言い訳を誰にするでもなく、俺は1人で呟いた。

声をかける前に、彼女は俺の存在に気づいた。

前と同じ場所、辰野子橋にいた彼女はあいかわらずのパステルカラーのワンピース。

傘をさしていないのに、濡れていない。

「あ！」

辺りには俺しかいない。つまり声をかけられるのは俺しかいない。

彼女は俺を見つけるなりすぐに声をあげ、駆け寄った。

「あ、あの、この前は脅かしたりしてすみません！久しぶりに人と話して私、嬉しくてついはいしゃいじゃったんです」

幽霊。

俺はこの女性をなぜか怖いとは思わなかった。この世から逸脱した、非常識な存在。それを目の当たりにしても、彼女の醸し出す人間的な雰囲気俺を辰野子橋にとどめる。

前と同じように傘をさしていない彼女は、トリートメントに浸したようなさらさらの髪をなびかせて言った。

近くで見ると意外に身長は低く、少しだけ上目遣いになることが不自然でなく可愛らしい。探とは大違いだ。

前とは異なり傘をさしている俺は、なんとなく傘の下に彼女を入れた。

幽霊。

傘の骨の先から滴る雨粒が、肩に落ちて冷たい。

人間。

彼女は あ、と口に手を当てた。

俺の顔を不思議そうにじっくりと見ている。

幽霊と人間って、何が違うんだ？

「君ってさ、幽霊なの？」

まじまじと顔を見られるのが恥ずかしくなって、俺はそう尋ねた。

あ、とまた彼女は間抜けな声を出して、あ、はい、と笑った。

「すみません、ゆうれいっていう言い方、可愛いですね。そうですね、私は幽霊なんだと思います。」

彼女はそう言って一歩、俺から離れた。

木製の橋が歯ぎしりのような音をたてる。

「雨が当たらないから、濡れないんです私。だから傘はいりません。」

そうだとは思った。けど、なんとなく、そうしただけだ。

俺はそれを口には出さなかった。

「雨とかのものは透けて通り過ぎちゃうんですけど、普通に橋には立てたりしちゃってるんですよ、よく考えたら。生前当たり前だと感じてたことは幽霊に反映されるということでしょうか。」

「あ、確かにそうだな。ふしぎだ。」

「6年間暇で暇でしょうがなかったもんで。ちょっと哲学しちゃったわけです。」

自慢げに話す彼女は、なんだか可愛げがあった。

彼女は6年ぶりに人と話したと言っていたが、人懐っこい性格だとすぐに分かるほどよく話しかけてきた。

俺は彼女と初対面のはずだが、彼女は俺のことをまるで昔から知っているみたいに楽しそうに話す。

行きていた頃、この子はどんな子だったのだろうか。

俺はふと、1人でそんなことを思った。

「幽霊っていってもさ、俺、正直頭こんがらがってるよ。今こうやって普通に話していることが本当に不思議なんだ。酔っ払って、ふわふわしているみたいなの。」

「ああ、すみません、いきなり幽霊だなんて言われても困りますよね。」

はにかむ彼女のワンピースが揺れる。

雨が降っているのに、ワンピースか風に煽られて白い細い足をのぞかせる。

「今日はこの後なんか予定があるんですか？よろしければ私、幽霊になって初めて知ったこと、誰かにずっと話したかったんです。」

思いがけない誘いだった。

人と話せることがよほど嬉しいのだろう。

俺は探との約束を思い出した。

おしゃべり好きの幽霊ならば、取材も快く受けてくれるに違いない。

身構えていたが、気さくな幽霊...気さくな人でよかった。

「ないよ。今日は君に会いに来たんだ。」

「うお、幽霊を口説こうとするなんて、ハルさん、もしかして女ったらしですか？」

「そ、そんなつもりは、ってあれ？名前言ったっけ？」

「この前履いてたジャージに刺繍が縫い付けてあったんですよ。あ、そうか、仕事無くしたから暇なんですね、それもこの前言ってましたね。叫んでましたね。」

自殺の説得に思わず使ってしまった俺の失職のことか。ちゃっかりしっかり聞いてたのか。

「あれは君が自殺しそうな感じだったから...仕方なく...あそうだ、君、なんて呼べばいい？」

「ああ...ええと...うーん、本名はあまり言いたくないですよ、一応故人なので。」

「あ、そうだよ。じゃあ、何か呼び名決めてもいいかな。雨の日にいるから、雨女とか。」

「センスない！可愛くないですよ雨女なんて！まあでも、雨を連想させるというアイデアはいいですね。」

彼女は頭を傾けてうなった。

俺たちは川沿いを揃って歩くことにした。先日彼女を初めて見つけた日に比べて今日は雨が弱かったため、川は濁りはしているものの穏やかな音を流していた。

彼女は俺の少し前を歩いて、後ろに手を組みながらゆらゆら歩いている。

俺の傘に再び入れようとする、彼女は軽く手を振って断った。ほとんどの人には私の姿は見えないので、と彼女は言った。最初はその言葉の意味があまりわからなかったが、結局は初対面の男の傘に入るのには抵抗がある、という意味での丁寧な断り方なのかもしれないと俺は思った。

彼女の足元を見ると、水溜りをはねることも、泥土に足跡を残すこともなかった。歩いているのにそこにはいない。矛盾といえるその表現が最も適切で、俺は再び奇妙な感覚になる。

だんだんと雨は霧のように薄くなっていき、傘が水滴を落とす頻度も減っていた。

道沿いに控えめに生える雑草は、梅雨による連続の雨でもうお腹いっぱい、とくたびれているように見えた。

「しずく。」

彼女はそう呟いた。

「私のことは雫と呼んでください。」

しばらく黙り込んでいた彼女が、振り向いて言った。

ずっと静かだったのは自分の名前を考えていたのか。それにしても雫だなんて、また風流な呼び名を考えたものだ。まあ呼び名なんてなんでもいいし、「君」よりはマシだろう。

「雫は雨の日にしかいないの？」

命名された名前を早速使って尋ねてみたが、我ながら奇妙な質問だと思った。そもそも幽霊という概念について異本的な知識も俺には全くない。幽霊はどのようにして生まれるのか。幽霊になってからは普段何をして過ごしているのか。どこに存在するのか。仲間などはいるのか。なぜ雫は俺だけにしか見えないのか、など疑問は腐るほどあった。しかしいざ口に出してみようとするあまりにも現実味がなく自分でも頭の整理がつかなくなるような気がしたので、とりあえず核心からは少しズレた当たり障りのない質問で会話を始めようかとしたが、結局は落とし所のない

ような質問になってしまった。

「もしかして私が自由にあの世とこの世を移動できると思ってますか？晴れの日はその世にいて、雨の日限定でこっちに来る、なんて思いました？」

その問いかけはおおよそ当たっていた。俺は無意識のうちに雫は雨の日のみ現れると思っていたようだ。実際、先日と今日どちらも雨だったし名前も雨を連想させる雫ときた。そう勘違いしてもおかしくはない。だが、あの世とこの世の行き来については考えたこともなかった。

「ハルさんは気を遣って聞かないと思いますからもう言っちゃいますが、私実はさっきの橋で自殺したんです。6年前。その日も雨だったんですけど、」

俺は足を止めた。

水溜りにつつこんだ靴が波を立てて揺らした。

雫は6年前、あの橋で自殺した。

俺は雫があっさりと言ったその事実を頭の中で復唱した。

初めて会った時の雫の様子をふと思い出した。雫は橋から顔をのぞかせて、下の濁流を見ていた。

そもそも俺はあの時、女性が自殺しそうと感じて叫んだ。そう考えるとある意味間違っただけではなかったのかもしれないが、だとしたらなぜあんなところにいたのか。自殺した時を思い出して苦しくなるだけではないのか。

俺が立ち止まって考えを巡らせることに構わず、雫は話を続けた。

「気づいたらあの橋にいました。それから6年間、成仏もできずにさまよっていたというわけです。」

雫はさらりと、なびく髪をかき分けるように言った。

俺にはそれが、ひどく重く辛いことのように思えた。というよりもまぎれもない事実だ。

雫は自分が死んだ場所に6年間も立ち続けたということをお笛でも吹くように告げてしまった。

「6年前に死んで、ずっとその場所にいた！？」

動揺して、不躰な言い方になってしまった、と言った後に思った。

それじゃあ雫は、読んで字のごとく地縛霊ということなのだろうか。

「ずっとそこにいたというか、別に動けないわけじゃないんです。歩いて散歩したり、ジャンプすれば二メートルは軽く飛べるので隣町まで行って屋根の上を走ったこともあります。」

「そ、そうなんだ」

「ただ、雨の日は...雨の日になると、どうしても思い出してしまうんです。」

俺は音が鳴るくらいの量の唾を飲み込んだ。

目の前にいるのは死んだ人間であるということに、今まで自分はどれほど鈍感だったのか、俺は思い知らされた。

その時の雫はさっきよりも、雨が透過していると一瞬で判断できそうなほど透明にみえた。

「雨の日に橋の上から、死よりも重い後悔と共に落ちたこと」

傘から雫が一滴、滴り落ちた。

それからしばらくは当たり障りのない内容の会話を交わし、最後に次に会う約束をして別れを告げた。

探のことは何も触れなかったし、取材のことについても言わなかったが、次また会うし、言えば快諾しそうだと感じたので焦ることもない。

雫と接触し、次に会う約束を取り付けることにも成功したので、自分的にはうまくいったと自負した。

とりあえず探に、取材の件は順調に進んでいるとメールで報告することにした。

『Re:取材の件

今日例の幽霊に会った。名前は雫。次に会う約束も取り付けたし、取材も言えば出来そうな雰囲気だった。』

メール送信ボタンを押して携帯を机に置き、両腕を上げて大きく伸びをした。腰の骨がパキパキと乾いた音をたてる。ベッドに座り、テレビのリモコンを操作した。しばらくテレビを眺めていると、メール着信のバイブが鳴った。早速メールを開いて見ると、

『Re:取材の件

OBK、略してOKです！』

という短い了承文が送られていた。

不謹慎だぞ、と俺は笑って呟いた。

雫と次に会う日は3日後となっている。

次は晴れたらいいなと、どんよりと浮かぶ黒色の厚雲を窓から見つめながら思った。

6月11日

「おばけなんてなーいさ、おばけなんてうーそさ、」

「それ、雫が歌ってどうするんだよ。」

オバケ撃退の歌を揚々と歌う雫に、俺は小声でツッコミを入れた。

幸運にも、今日は天気に恵まれた。

先日続いたドス黒の積乱雲は吹き飛び、キントウンのような小ぶりの浮雲が広大な青空を泳ぎ回っている。

太陽の光が辺りの雑草の水滴に反射し川辺一帯はまるで宝石がちりばめられたようである。

太陽光は雫の体を透かし、雨の日よりも目視し辛くなっていた。

「今日は晴れましたね。どこか遊びにでもいきますか？」

久しぶりの日光を浴びてきらきらと輝く川辺で、負けじと雫の笑顔が光る。

俺は雫につられて思わず笑みをこぼした。

「そうだね、どこにいかうか。」

女性と2人で出かけるのは久しぶりだ。相手は幽霊だとしても、女性であることに変わりはないし、ちょっと体が透けること以外人間となんら違わない。雫の笑顔はとても素敵だと感じた。

高校生の頃、俺は正直いってモテた。サッカー部ではエースとして部員からもクラスメイトからも信頼は厚かったと思うし、自分で言うのもなんだが、容姿も悪くない。それに加えて女子に対して話すことがおっくうになるということも全く無かったので、自然と告白されることも多くなった。だが俺は当時少々飽きっぽい性格のうえ1人の女性に交友関係を縛られることが嫌になって付き合っても別れることが頻繁に起きた。いや、それはまだ美化した側面で、今思えば高校生特有の自己満足だったのかもしれない。

そうして高校生までは己のプライドをせっせと高めるようなことばかりしてきた。実際に高校生の頃の自分は今の俺からしてみれば無知で生意気なガキだった。そう思えるようになったのは、高校卒業後、人生における最初の挫折がきっかけだった。

俺はスポーツ特待で大学に入学した。挫折というのは一言で言ってしまうと、ケガによる部活の退部である。よくある話だが、当時の俺にとってその出来事はショックだったし、ガチガチに固まったプライドを粉々に砕いた。その時、サッカーは自分にとって好きだからやるのではなく、自分を他者に認めさせるための道具に過ぎなかったことに気づいた。

それからは他の部員の励ましにも耳を貸さず、ただ1人孤独に、自分はなんのために存在するのかという解決できるはずもない自問自答を繰り返した。サッカー部には正式な届けを出すこともなく事実上退部した。

それからの大学生活は目も当てられないものとなった。大学2年生だった俺は退部の後から授業にも顔を出さずただひたすらに酒に明け暮れた。昼間は引越しのバイトをして、ためたお金は酒とパチンコで溶けた。大学から少し抜けた繁華街で朝まで名前も知らない大学生やサラリーマンと飲み、バイトの時間まで寝た。

自分はなんのために生きているのか。

酒を飲んでいる間は、その恐怖に追われることはなかった。

俺は現実から逃げた。

床に砕け散ったプライドを丁寧に1つ1つ回収しては、2度と戻らない破片を大切に集めていた。破片を集めているうちに、気づけば両手は血だらけになっている。俺はこのまま、出血多量で死ぬんだ。そう思った。

探に出会ったのは大学4回生の春で、居酒屋で話しかけてきた。

「青空晴太さんですよ。」

ダボダボの白パーカーを着て、首からぶら下がったフードの紐がゆらゆら揺れていた。

探は俺の同じ大学の一歳年下で、その年は俺は留年していたから学年は一緒だった。サークルの飲みで来たが、1人で飲んでいる俺を見つけて話しかけてきたのだ。俺は探のことを知らなかったが、探の方は俺を知っているようだった。

「知っていることが、僕の仕事ですから」と探は言った。探はその時からライターとしての活動を始めていて、ツイッターやインスタグラムなどのSNSで投稿を行えばたちまち数千件を超える'いいね'がついた。

しかし探は自分が軽い有名人であることを少しも鼻にかけることがなかった。それどころか俺の話に注意深く聞いて、相槌を打ったり時には探なりの意見を述べたりした。しばらく中身ある会話をしていなかった俺は探との会話が忘れられず、その後俺の方から探を飲みに誘うことがちょくちょくあった。探は予定がたくさんあって忙しそうだったが、俺の誘いを無下にしたりはしなかった。

俺はその頃から就活をするようになった。部活を途中でやめて、酒とパチンコに明け暮れた空白の時間のせいで就活は難航したが、なんとか働き口を見つけることができた。

就活を終えて落ち着いた頃、俺は探にお礼をした。お礼といっても、ものをあげるのもなんだか気恥ずかしいし、そもそもお礼ってなんだろうと悩んだ挙句、結局飲みに行って奢ることにした。探が話しかけてことがきっかけで俺は立ち直れた、ありがとう、と探に伝えた。探は相変わらず謙虚で、僕は何もしてません、と笑っていた。

その後、探は俺の大学生活をモデルにした文章をかいてもいいかと尋ねてきた。いいけど、俺の大学生活なんてかいて面白くなるのか？と俺はバカにしたが、そんなことはありません、と探はきっぱりと言った。俺が許可すると探は大げさに喜んでみせた。

後日、探に勧められて初めて探のホームページを見てみると、たくさんの大学生のありのままの生活がリアルに文章に形を変えてしたためられていた。内容はどれも面白く、全員分の大学生活を半日かけて一気に読み終えてしまった。その中にはもちろん俺の話もあり、探の高校時代の不思議な体験もあった。

俺はなんだか、今までの自分がいい意味でバカらしく思えたきた。他人と比べて、自分の価値を高めることばかり考えてきた。だけど、この世界にはたくさんの人がいて、同じ国同じ大学という枠でも、人によってこんなにも違う人生を送っていて、どれも楽しく美しい。どんな人生も間違っていないし、誰かが点数をつけて決まるような価値の基準もない。俺は探と出会ってそのことに気づくことができた。

27歳で会社が倒産した時も、底知れない不安に襲われたがなんとか立ち直ることができた。それでも人はなんとかやっつけていける。それでも人は生きてゆける。そう思えたからだ。

俺はスキップで前を踊る雫の背中を眺めた。

どんな理由で、雫は自殺をしたのだろう。

できれば、自殺する前に会いたかった。

人生は、生きていればなんとかなる。

もしかしたら、そう伝えられたかもしれない。

地平線まで伸びる青空を眺めながら、吸い込まれそうになる意識を雫に戻した。

6月18日

梅雨の時期は雲ひとつない晴れの日が少なく貴重なので、晴れた日にどこに行くかはあらかじめ決めていた。

朝起きて窓の外を見上げると、雲ひとつない青空が広がっている。俺は急いで押入れの中からリュックサックを引っ張り出し、軍手やらレジャーシートやら、登山に必要そうなものを乱雑に詰め込んで転がるように家を出た。

「晴れましたよ！晴れました！ハルさん！」

雫はいつもの橋の上をぴょんぴょん飛び跳ねて嬉しさを体現した。

今の雫の運動能力なら、俺に遅れを取るどころか登山家も驚くほどあっという間に登ってしまいそうだった。

「とりあえず食料と水を買に行くか」

「私、どっちもいりませんよ。」

「俺の分を買うんだ。いきなり晴れてなんの用意もしてないから」

仕方ないと言うように、へーい、と雫はだらしなく敬礼した。

ここ1週間、俺は毎日のように雫と会っていた。

雫はものをもてないから、ボーリングや遊園地に遊びに行くことはできなかった。そこで俺たちはカラオケに行ってマイクを使わず2人で歌ったり、喫茶店で雫の幽霊談を話したりして遊んだ。この1週間で分かったことが、やはり雫は俺だけにしか見えないということだ。最初は気にせず会話していたが、俺以外の人には見えていないし聞こえていないということに気づいてからは声のボリュームを落とした。町では周りに人がたくさんいるから、そういった常識では考えられないようなハプニングがいくつか起こった。

例えば雫が前を歩いていると前があまり見えなくて人と正面衝突してしまったり、電車に乗っている時、雫が座っている席に重なるとおじさんが座ってくることだったり、面白いと思うこともあったが意外に神経を使い疲れてしまう。そこであまり人がいない自然の場所に行こうと話合ったのだ。

そして今日は念願の快晴。山の頂上から見た景色はさぞ美しいことだろう。

雫のテンションが高いことも、道行く人の胸を腕で貫いて、北斗神拳と叫ぶ様子から十分に伝わってきた。

雫と過ごす時間は楽しかった。幽霊だというのに、どんな人間よりも人間と話しているような気がした。雫は無邪気で繊細で大胆で、俺には持っていないものを持っていた。きっとたくさんの人から愛されたんだろうな、と俺は勝手に想像した。

山には家から車で一時間ほどで到着した。標高は約千メートルで、初心者向けとネットにはかいてあった。

雫はいつも通りのワンピースにスニーカーで、俺はジャージに運動靴を履いて臨んだ。

山登りは予想どおり、スムーズに進んだ。雫は俺にペースを合わせてくれた。

「ホー、ホケキョ！」

「似てないなあ。」

どこからか聞こえてきたウグイスの鳴き声を雫が真似をした。

山にはウグイスだけでなく、聞いたこともないような鳥の鳴き声が聞こえてきた。さらに川の流れる音、木々のざわめきが重なって、山のオーケストラだ、と雫は呟いた。

頂上は意外と寒かった。

雫のワンピースの格好は見るからに薄着で寒そうだったが、どうやら暑さ寒さは感じないらしい。ゴツゴツとして足場の狭い岩を、雫は身軽に飛び跳ねて遊んでいて、俺はそんなことができる体を少しだけ羨ましく思った。

「ハルさん、景色が綺麗だよ。」

雫は両手を広げて、胸いっぱい絶景を味わっていた。

うん、と返事をして俺も景色に目を向けた。

こんな景色を味わえるなんて、会社で働いている時は想像もしなかった。俺は少しだけウルっときて、鼻水をすすった。

「え、なんで泣いてるんですか？」

気づくと雫が俺の顔を覗き込んでいた。

「うわあ！」

「ハルさん泣いてる！泣いてる！」

雫はニヤニヤしながらそう言った。

「感動したんだよ、わ、悪いかよ」

なんだか恥ずかしくなって、俺はそっぽを向いた。

素直に感動なんて、俺の人生ではもう味わえないかと思ったから。

と言葉に出すことはしなかったが、なにか温かいものが心の中で広がっていくのを感じた。

6月19日

『あ、お疲れ様です。探です。』

電話口から聞こえてきたのは探の声だった。

「お疲れ様。」

丁度風呂から上がったところだった俺は携帯を耳に当ててベッドに腰掛けた。長年使っているベッドが、ギシっとため息をもらす。

『あれからどんな感じですか？雫さん。』

「ああ。仲良くしてるよ。良すぎるくらいだ。今日も一緒に散歩したよ。」

『さすがですね、それじゃあ取材の話は既に？』

「あー、」

俺は言葉をつまらせた。

1週間以上の時間がありながら、俺は取材の話はまだしていなかった。明日でいいか、明日でいいかと先延ばしていたのだ。

それほど、雫と過ごす時間は楽しかった。極端に言えば、取材の話は忘れてしまっていたと言っても過言ではない。俺は、幽霊と遊ぶなら何ができるか、何をしたら面白いかということばかり考えていた気がする。

「まだしてない。」

俺は申し訳なく思いつつも仕方なくそう言った。

『大丈夫ですよ。いつでも構いません。それに、別に言わなくてもいいです。』

意外な反応だった。それに、言わなくてもいいとはどういうことなのか。アポ無し取材ということだろうか。探は続けて言った。

『6月23日、僕が指定したカフェに来てもらえれば問題はありません。住所と時間はあとでメールで送ります。』

「そういうことか。でもまあ、一応言うておくに越したことはないよな。」

『そうですね。よろしくお願いします。』

話がまとまったところで電話は切れた。

明日言おう。

俺はそう決意した。

6月20日

どんな店よりも騒がしい店に、俺と雫は来ていた。自動ドアをくぐっても、いらっしやいませ、と駆け寄ってくる店員がいなければ、落ち着いて座る座席もない。ガチャガチャと、町全体の音を集めて箱に入れてみました、というような場所である。

「ゲームセンターなんて久しぶりです！」

雫は珍しいものでも見つけた子供のように目を輝かせた。

雫はどこに行っても、ここは初めてだとか久しぶりだとか、そんなことを決まって口にする。それは少なくとも6年間どこにも行ってないことが原因なのだろう。

俺は辰野子橋にたたずむ雫の姿を思い浮かべる。

まさか毎日あそこにいたわけじゃあるまいな？

ぬぐい切れない懸念がじわじわと湧き上がってくる感覚。

考えても答えは出ないはずなのにいつまでもぼうっと立っている俺を見兼ねて、雫が声をかけてきた。

「なにしてるんですか？はやくいきましょう」

俺が顔をあげると、雫はいつも笑顔だった。

「楽しそうだね」と以前雫に言ったことがある。すると雫は、「幽霊って、何かと不便なんで

すよ。なにも触れないし、人には気づいてもらえないし。だから人と話して、どこかへ遊びに行くことがとても楽しいんです。」と言っていた。確かに雫は20歳前後で、まだまだ遊び足りない年頃だったのだろう。

俺は早速、適当に見つけた巨大ぬいぐるみのクレーンゲームの台の前に立った。百円玉を細長い穴に入れると、軽快な音楽と共に多色の光がぬいぐるみを照らした。クレーンゲームには3つのボタンが設置されていて、横矢印と縦矢印、そしてGO!とかかれたボタンがある。俺は慎重に横ボタンを押した。頭の中に立体的な映像を浮かべて、ここだと思うところでボタンをはなす。GO!ボタンを押した時、クレーンゲームの中から雫が顔を出した。

「さあ、とれますかね？」

雫は言い換えれば透明人間である。だからこのようにクレーンゲームの中に侵入し頭だけをぬいぐるみが置いてあるスペースに出すことができるのだ。その姿はもちろん俺以外には見えない。可愛げなぬいぐるみたちの中に生首がアームをじっと見つめて息を飲んでいいる。怖い。アームはぬいぐるみを掴んだが、重さに耐えきれずぬいぐるみが落ちてしまった。だが気づくとぬいぐるみの代わりに、人間がアームに捕まっていた。

雫が取れた。

「うわあああ、ハルさあん、」

もちろん本当に捕まったのではなく捕まったふりをしているだけだ。俺は思わず吹き出してしまった。雫はたまに、霊体にしかできないボケを見せてくれる。

俺はツボにはまってしまい、しばらく腹を抱えて笑っていた。

ゲームセンターでも雫ができることは少なく、俺たちは2時間もたたないうちに店をでた。

結局いつも通り、俺たちは慣れ親しんだ町を散歩した。

「次はどこに行きますか？」

雫が尋ねた。

「そうだなあ、カフェも山もカラオケも行ったし、町中散歩もしたからなー」

俺はこの小さい町に、他にいくところがあるか考えた。ついには行き詰まり、携帯の電源を入れた。観光地としては何の魅力もないこの町だったが、いくつかの候補が挙がっており、俺は1つを雫に提示した。

「水族館とか。雫も楽しめそうじゃない？」

水族館、と雫は呟いた。雫が俺から目をそらしたため、俺は慌てて言葉を付け加えた。

「水族館は行きたくない？なら他のところも…」

「いや、水族館行きましょう。水槽の中に入れて面白そうです。」

雫の言葉に思わず俺は吹き出した。

幽霊の体の特性を十分に発揮して、新しい楽しみ方を編み出している。

「そっか、じゃあ行くか。」

俺は笑いながら言った。

水族館には2日後に行くことになった。2日後は22日か、と頭で思った時、俺は大切なことを思い

出した。

23日の探の取材のことを言うんだった。

「雫、あと23日なんだけどさ、」

俺は機関銃のごとく探との関係や会話の内容を雫に話した。過去に探に助けられ、取材に協力したいという旨である。報酬の話はしなかった。

「いいですよ。」

雫は快諾した、ように感じた。

家に帰る途中の空は黒かった。

明日からまた雨かな、洗濯物は中に干さなければ。

遠くの方で、ゴロゴロと雷が鳴る音がした。

6月22日

その日は生憎の雨だった。しかし今日は水族館に行く予定なので、特に支障はない。

待ち合わせにしていた最寄りの駅に着くと、既に雫が待っていた。

「ごめん、待った？」

いいえ、と雫は呟いて、改札を通り抜けた。雫の体が改札をすり抜けていくのを、他の誰も見ていない。見る事ができない。俺だけが雫を見ることができる。よって体がものをすり抜ける様子を見て腰を抜かす人はいない。

俺は急いで切符を買って雫の後を追いかけた。改札が開いてすぐ、独特のブレーキ音と共に電車が飛び込んできた。その巨大な鉄の塊は息を吐き出すように息を漏らし、ゆっくりと止まった。プシューという音で扉が開いた時には、雫は電車に乗っていた。俺は雫が入った車両に乗り込んだ。

「扉が閉まります。」

車掌の合図で電車は進み始める。徐々に加速していく。

雫の方をちらりと見る。

雫は窓の外を見ていた。

俺も外の方に目をやると、いつもの町が次々と現れては消え現れては消え、街並みは残像と重なり横に伸びた。

電車の中で会話をする事はない。雫の存在は周りにはないことになっているので、俺1人で話しているように思われることを避けるためだ。

駅に着いても、雫はすいすいと人を避けることなく改札を抜けた。一方実体のある俺は雫に追いつけるはずもなく遠くにかすかに見える雫の背中を追いかけてながら早歩きで進んだ。

水族館は降りた駅の近くにあった。〇〇シーワールドへようこそ！とかいてあるアーチ状の看板が目に入る。雨が降っているせいからなのか、心なしか暗い印象を受けた。

水族館の前でたたずむ雫を見つけた。

雨がしとしと、傘にのしかかる。

雫は空を見ていた。厚い雲に覆われて水滴をいそいそとこぼす巨大な空を見上げていた。

「さあ、中に入ろう」

俺が近づいて言うと、雫は空を見上げたまま「はい」と答えた。雫の瞳は、厚く広がる空の海に身を投げるのではないかと、そんなことを予感させた。

今日は言葉少なだな、と俺は思った。

水族館に入ると、長いエスカレータがあった。エスカレータは水のトンネルをくぐるような形に設計されていて、乗るとたちまち辺りは青色に染まった。トンネル状の水槽にはたくさんの魚が泳いでいて、来客を歓迎しますとでもいうように勢いよく泳いでいる。

雫は俺の一段上に立っていた。雫もこの青一色の光景に目を奪われているようで、ふと覗かせた横顔はどこか儂げであり美しくもあった。

「マンタ」

彼女が呟いた言葉が目の前を泳いでいる魚だと、分かるのに何故か時間がかかった。

エスカレータを抜けると、巨大な水槽が出迎えてくれた。小さな鰻の群れに大きなサメのような魚、先ほど見たマンタ、エイだろうか、額に大きなコブがついた魚もいる。悠然と泳ぐ魚たちが、水族館にいる人々の時間を滑らかにしているように感じた。

「クロマグロ」

てっきり大声をあげて水槽の中に飛び込んでいくかと思っていたが、意外にも雫は大人しかった。魚の種類や名前が表記してある光る看板と巨大な水槽を交互に見ては、魚の名前を呟いた。

「チョウチョウウオ」

水槽は厚いガラスに覆われている。前から見ると分かりづらいが水族館の水槽のガラスの厚さは1メートル以上あると聞いたことがある。この大きさの水槽はそれ以上は優にあるかもしれないと思った。

厚さはどのくらいあったの？と雫に尋ねようと思っていたが、どうやら今日は少し落ち着いているらしい。

これじゃあまるで、付き合って初日のカップルだ。

俺は高校生の頃、なんとなくデートで使った水族館を思い出した。

ここより小さくて魚も少なく、客も少なかった。今でもまだやっているのだろうか。

そんなことを思い返していると、雫が次の水槽へ歩き出した。

「カクレクマノミ」

雫は6年前、あの橋で死んだ。死よりも重い後悔と共に落ちて死んだ。

最初にそのことを聞いて以来、自殺に関して雫に質問をしたことはない。

モラルというか、無神経でありたくないというか、そういった理由だ。昨日今日会った人間がズカズカと踏み入っていい領域ではない。

「ナンヨウハギ」

雫は成仏とか、そんなことを考えたことはあるのだろうか。この世が辛くて自殺したのに、よりによって自殺したあの橋に死んだ後も留まり続けるなんて、あまりいい考えだとは思えない。死ぬ前の記憶はあるようだし、後悔もしているようだ。どうして死んだ場所に居続けるのか。俺は疑問に思っていた。

「アオヒトデ」

俺は少し前から、雫を成仏させたいと思っていた。成仏させて、楽にしてやりたいと思っていた。雫は嫌がるかもしれないが、それでも俺は雫をああの橋の呪いから解き放ってやりたい。雫はあの橋に縛られ動けなくなっている。自由に何処へでも動けるとは言っていたが、心か、あるいは精神が橋から動けなくなっていることは明らかだった。

俺は知っていた。

雫は本当に、雨の日に、俺がいない時は橋に立っている。橋の上から、濁流を覗いている。

「ツマリマツカサ」

雫は同じように名前を呟いては、次の水槽へ足を進めた。

俺には目もくれず、水槽を食い入るように見つめている。

「ツユベラ」

お前、なんで自殺したの？

「キツネベラ」

俺はその言葉を飲みこんだ。

雫は声色を変えずに、魚の名前を羅列させる。

「アサドスズメダイ」

俺は痺れを切らし、雫に話しかけた。

「なあ、今日元気くないか？気分でも悪い？」

幽霊が体調を崩すことなんてあるのか？

余計で無意味な疑問が湧いてくる。まわりくどい質問をしたせいだ。

俺が尋ねても雫は何も答えなかった。

黙りこんで、体も俺からそっぽを向いたままだ。

俺はその態度に、少しだけ苛立った。

「おい。」

苛立ちを滲ませた言葉が、俺の口から漏れた。

肩を掴めない俺は、雫の斜め前に移動した。

しかし、雫の顔を見た俺は啞然とした。

水槽の青い光に照らされる雫の白い顔。

その大きな瞳から、涙が溢れている。

「え、おい、どうしたの」

俺が慌てても、雫は何も答えない。ただ呆然と立ち尽くして、目を開き、涙を垂れ流している。どこに焦点を当てているのかも分からない。

うめき声をあげて泣きじゃくるわけでもなく、嗚咽を飲み込みながら両手を顔に覆うこともない

。ただ静寂に、真っ直ぐと前を見つめて涙を流している。

死よりも重い後悔と共に落ちたこと。

あの時の雫の言葉が、目の前のカラフルな魚の泳ぎに合わせてるようにぐるぐると頭を回る。

「分からなかった。」

彼女が呟いた。

ゆっくりと、それでも表情は変えずに口だけを動かす。青い水槽に照らされた真っ赤に充血した目が、左右に微かに揺れる。涙の雫をこぼす度、彼女を形作る粒子が溶けて、欠けていくような気がした。

「私も、どうしてあなただけに私の姿が見えるのか分からなかった。」

水槽の下に敷いてある軽そうな砂から、細長い生き物が顔を出した。ゆらゆらと体を左右に振って、まるでダンスでもしているようだ。

「どうしてあなたなの。あなたじゃなければならなかったの。誰でもいい、他の人ではだめだったの。」

カラフルな魚、水草、細長い生き物のタイミングが合ってきた。ダンスパーティーが始まった。

「あなたは私のことなんて覚えていないし、私はあなたのことが嫌い。あなたには二度と会いたくなかった。消えてほしいくらい。私のことは何も知らないあなたは、また私を傷つける。」

お母さんこの魚、踊っているみたい！と子供が隣ではしゃいでいる。

水槽の奥で膨らむ泡は水面に向かって上昇しては弾け、上昇しては弾け、上昇しては弾けた。

「でも、だけど、今日、やっと、はっきりとわかった。これは罰なんだ。私が犯した罪をこの先も永遠に忘れてはならないという罰。何年何十年何百年償い続けなければならない。消えることのない罪。私は背負い続けなければならないのね。」

お母さんみてみて！この魚！こんな！

こら、静かになさい。

ごめんなさいね、うちの子が。

「一ヶ月、付き合ってくれてありがとう。これで私は、またあの日のことを思い出すことができる。さようなら。私のことは忘れて下さい。ああ、そうか、もう忘れてたね。」

水草が揺れている。

泡が弾けている。

上昇しては弾けている。

細長い生き物は気づくとまた地面に潜っていた。

「ありがとう。もう、会うことはないでしょう。」

上昇した泡は水面に届くと、目には見えなくなった。

6月23日

電車に乗って20分、駅から歩いて10分の場所にその喫茶店はあった。

丸太で形作られた建物には、自然とも人工ともいえない絶妙なツルが巻きつき、大きなとがった葉が頭を垂れている。

丸太のドアを開けると、カランコロンと心地よい鈴の音が鳴った。コーヒーと木の香りがする。探は1番奥のテーブル席に座っていた。鈴の音で俺に気づいた探は、こっちは、と手を上げた。俺は探と向かい合うようにして座った。俺が座ると探は店員を呼んで、コーヒーを2つ頼んだ。

「本当に、身元が分かったのか。」

俺はいきなり本題に入った。いつもの雑談という名の寄り道は一切ない。

「はい、知っていることが仕事ですから。」

聞いたようなセリフを探は言った。探は探は相変わらず冷静だ。神妙な顔をして焦って慌てているのは俺だけで、探はいつものペースだ。

「立花静香。それが彼女の本名です。」

立花静香。

俺は頭の中でその名前を復唱する。

復唱し、記憶を辿る。生まれてから今まで出会ってきた多くの人々が次々に顔が浮かび上がっては消え、走馬灯のように駆け巡る。

ねえ、ハルくん

立花静香はそう呼んだ。

俺は彼女のことを知っている。

カランコロンと鈴が鳴った。店員がいらっしやいませ、と声をかけると、その男はこちらの方へ歩いてきた。さっきと同じように、探が手を上げた。顔をあげると、その男と目があった。

「よお。久しぶりだな。」

男は言った。

「事前に言ってなくてすみませんハルさん、予定があるか分からなかったの。谷口雅さんです。」

谷口雅。俺はこの男のことも知っていた。いや、この男に関しては俺に限ったことではないだろう。この男は有名人だ。男子卓球日本代表、谷口雅。「タニン」の愛称で親しまれている。だが、俺が知っているのは日本代表としての谷口ではない。俺が知っているのは、高校の同級生としての谷口だ。

「いつ以来だろうな、サッカー部のハルタくん。」

「サッカーはやめたんだ。怪我をして。」

「...それは大変だったな。」

「...お前こそ、すごいな、日本代表なんて」

「たいしたことねえよ。」

「あるだろ。」

まあまあ、と探が椅子に座るよう谷口に促す。探の隣に座った谷口に、いつもテレビで見せるような健康的な笑顔はない。眉にしわを寄せ険しい表情で俺を睨みつけている。

重い空気に割って入るのが億劫なのか、控えめな「失礼します」と共に頼んだコーヒーがテーブルに置かれた。探はそのまま、コーヒーもう一杯くださいと店員に頼んだ。

昨日の6月22日、水族館で雫が言った言葉は、どれも俺にとって理解できないものばかりだった。雫が青い水槽を虚ろな目で見つめながらぶつけられた、俺に対する怒りと哀しみ。どれも見覚えのないはずなのに、雫の乾いた涙と言葉は、鉄の塊のようなものに姿を変えて俺の心にぶら下がったままだ。いや、見覚えのないというのは今となっては無責任な考えかもしれない。俺は雫に会ったことがある。それはもはや言い逃れようのない現実として突きつけられてしまった。立花静香。そして、目の前にいる谷口雅。2人とも高校の同級生だった。この事実が無関係なはずがない。

「お前、立花と会ったのか。」

谷口が口を開いた。その口調からは苛立ちが滲み出ている。怒りともとれる。

「...雫のことが立花っていうんなら、会った。」

「ふざけてんじゃねえぞ！」

ドンと谷口が机を叩きつけると、コーヒーカップが一瞬浮いて、不安定に着地した。白のコーヒーカップが金切り声をあげると、店内が静まり返った。店内の異様な雰囲気を作った原因が自分であると気づいた谷口は、目を泳がせて謝った。声のトーンを落として、谷口は続けて言った。

「立花のこと本当に忘れてたのかよ。昔付き合ってたんじゃねえのか。」

谷口にそう言われる前に、俺は立花静香のことを思い出していた。谷口の言う通り、俺は高校生の時立花静香と付き合い合っていた時期があった。付き合い始めたきっかけはもう覚えていない。話しているうちに仲良くなって、なんとなく付き合ったのだろう。だが、記憶にもほとんど残らないほどだ。その恋愛はひどく淡白なものだった。立花静香とは二ヶ月も経たないうちに別れた。原因はたぶん、俺だろう。俺は高校3年間でたくさんの女性と付き合い、その時期が複数の女性と重なっていたこともあった。その時は自分のやっていることがどれほど相手を傷つけるのかわかっておらず、愚かさに気づけなかった。苦い思い出である。

数少ない覚えていることの中で、立花静香の印象は、「物静かでつまらない」だった。雫の印象とはまるで違う。

「付き合い合っていたけど、少しの期間だけだ。別れてからは高校の中でもあまり話さなかったし、卒業してからは連絡も全くとってない。幽霊の立花は...なんというか、別人だったよ、今でも信じられないんだ。雫と立花が同一人物だなんて。」

なるほど、と探が相槌を打った。

その横で、谷口が何かを思い出すように虚空を見つめている。

「6年前、葬式に行ったよ、立花の葬式に。異様な光景だった。」

「異様？」

谷口の言葉に、俺は思わず聞き返した。

それにしても、どうして谷口はこんなに立花のことで熱くなっているのか。

俺は少し冷静になってきて、そんなことを考えた。

高校生の頃はそんなに、いや、そういえばたまに一緒に帰っていたような気もする。仲は良かったのだろうか。それとも、俺の知らないところで付き合ったりしていたとか、そういうことなのだろうか。

「谷口さん、そのことなんですが、立花さんの夫と連絡とれました。」

探がそう口を挟むと、谷口は大げさに「本当か」と反応した。

「この後にでも、すぐ会えるそうです。」

「よし、ありがとう。ここで話しても時間の無駄だ。行くぞ。」

立花の夫？会う？今から？

雫の夫？

「ほら、お前もだ、ハルタ。」

初めて、谷口から呼び捨てで呼ばれたような、そんな気がした。

「な、何しに行くんだよ。」

「決まってるだろ。」

谷口は決意に満ちた表情で答えた。

「立花を成仏させる。」

目の前のコーヒーカップにはまだコーヒーが残っていた。

雫が、俺がコーヒーを飲む姿を向かいの席で眺めながら、「私、コーヒーは甘くしないと、やっぱり飲めないなあ。」と、両手を頬につけて言ったことを思い出した。

立花もそうだったのだろうか。

どうして、自分のことを最初に言わなかったのだろうか。

どうしてこの一ヶ月、俺と楽しそうに散歩をしていたのか。

どうして自分のことを雫と呼んだのか。

河川敷のぬかるんだ道を先頭で歩く雫。

雫はあの時、一体何を考えていたのだろうか。

家をでた途端、吐く息が白く染まる。

思わず目をぎゅっとつむって、両手に温かい息を吹き聞ける。両手をすり抜けた白色の水蒸気は、あっという間に空気に溶けて見えなくなった。

あっ、と私は思い出したように1人で呟いた。

体をひねり、鍵をさす。型がぴったりとあった金属がこすれて心地よい振動が手に伝わる。いそいそと鍵をカバンにしまって、磨き立てでピカピカに光ったパンプスのつま先を地面にとんとんとつつく。

仕事の時間にはまだ余裕があった。けれど、いつも気づくとギリギリの時間になってしまう。

二階建てのアパートを降りて、まだ誰も起きていないような冬の朝が私の側を通り過ぎて行く。

わたる、いつまで寝てるの！！さっさと起きなさい！

力強い母の声が、横の一軒家から聞こえてくる。そうか。世の中のお母さんはとっくに起きているんだね。

冬の朝を独り占めしている気分になっていた私は、この町でたくさんのお母さんが一生懸命朝ごはんを作っている様子を思い浮かべて、くすりと笑った。

寒さに比例して私の歩くスピードは速くなっている気がした。コツコツとアップテンポの足音が乾いた空気によく響く。

私はこんなに余裕を持って家をでるが、職場にはギリギリにつく。同僚には、女子高生じゃないんだから、と笑われることもしばしばあるほどだ。

遅れる理由は自分でも分かっている。

最近、子猫の群れを見つけたのだ。見つけてしまった、のかもしれない。私は公園に捨てられていた子猫たちを見つけてしまった。捨てられていた子猫を見捨てられなかった。といっても、捨てられていたのかもわからないし、もしかしたら親猫が育児を放棄したのかもしれない。でも私は、誰もいない公園でうろうろしている子猫を見た瞬間、捨てられたんだ、と確信した。と同時に、私が助けなきゃ、とってしまった。

それから私は仕事に行く前と家に帰る前に、公園に寄って子猫たちに餌をあげている。

後ろめたい、という気持ちは勿論ある。

野生の猫に餌付けすることを禁じる看板はその公園にももちろんあるし、最初は二匹だった猫も今では五匹に増えた。この先どんどん増えていったらどうなるんだろう、と不安をいだきながらも、餌付けをやめることはできなかった。

私が餌付けをやめたら、ということを考えてほうがよっぽど不安だからだ。

おせっかい

世間知らず

そんな世間の声が、私に直接は届かなくてもひしひしと私に伝わってくるような気がした。

じゃり、と公園特有の大きな砂粒を踏み潰す音になる。

私が公園に入ると、すぐに子猫たちが草陰からでてきた。

「ミャー」

「ムー」

「ミィー」

「マー」

「グウ」

十猫十色とでもいうのだろうか、猫は猫でもそれぞれに個性があり、模様や色はもちろん、鳴き声まで全然違う。

特に最後に顔を出した猫、この猫の鳴き声を最初に聞いた時、私は一人で笑ってしまった。何度か公園に通って、鳴き声が聞き分けられるようになった時、私は初めてこの猫たちと知り合った気分になった。5匹の名前はその時一気に決めた。

名前はそのまま鳴き声通りミャー、ムー、ミィー、マー、グウ。

安易すぎる気もするが、私はとても気に入っている。

私は鞆から缶詰を取り出し、その場で開けて地面に置いた。

群がる猫たちを膝を折り曲げて眺める。

今日、遅刻してもいいかな。

私の中の悪魔がそうささやく。

ポッチャリで無愛想なグウがご飯を食べ終えたのか、離れていった。

グウはいつも5匹の中で滞在時間が短い。1番遅くに出てきて、1番早くどこかへ行ってしまふ。

ミャーとミィーは人懐っこくて、可愛がられる方法を知っているという感じ。あざといと思っても、可愛い。ムーとマーは仲が良くて自由な猫だ。この2匹が1番猫らしいといえば猫らしい。

。

ふと、腕時計を見る。

-- やば。遅刻する。

「じゃあね、空いた缶は帰りに取りに来るから。」

返事をしない猫たちに向かって、私は告げる。

公園の出口に差し掛かった時、背後でミャー、と声がした。私は振り返らなかったが、なんだか嬉しくなって微笑んだ。

.

「そういえば由紀、今年でハタチなんだっけ。」

先輩にあたる橋口さんに言われて、私は少し嫌なことを思い出した。

コピーを頼まれてプリンターの前で立つ私は目線を橋口さんに移した。

「そうです、もう誕生日はとっくに終わってますけどね。」

橋口さんに関係のないことなので、顔には決して出さない。

「お酒飲めるようになるわね！」

入社してすぐ飲ませたくせに、と笑いながらツッコミを入れた。橋口さんは面倒見のいい先輩で

、よく飲みにも誘ってくれる。入社1年目のときからお世話になっていて、橋口さんには頭があがらない。けれど、そんなことを一切鼻にかけない橋口さんの性格が私は大好きだ。

ブー、とポケットが振動する。

あ、と私が携帯を気にするそぶりを見せると、橋口さんは「じゃあまた後でね」とプリンターから離れた。

携帯の画面にはラインの通知を知らせる表示が出ている。

『清水恵子』

懐かしい名前。

小学校に通っていた頃、一番長い時間一緒に過ごしていた人。所謂、親友というものだろうか。男子からよくからかわれる子で、(今思い出せばモテていたということか)きよみずだからきよみずだ！なんて言われてよく泣いていたっけ。私はその度に、男子を追いかけ回していた、ような気がする。

曖昧な記憶を起こしながら携帯を開き内容を確認する。

清水恵子:久しぶり！同窓会、行くよね？

短い文が、恵子らしいと思った。恵子は昔から可愛らしい容姿を持ちながら、素直でサバサバしている印象がある。しばらく会っていない友人に送るラインの内容がこれということは、本人に会って幻滅することはないだろう。

「おーい、由紀ちゃん、ちょっと、」

背後で男の声がした。たぶん、部長の佐藤さんだろう。

はーい、と私は元気よく返事をして、携帯をポケットにしまった。

.

その日も朝から冷えた。

私は懲りずにまた公園に来ていた。猫が群がってくる様子は、まるで定期公演を開いている宗教みたいに見える、なんだか笑えた。

公園で公演...

寒い寒い、と私は1人で呟いた。

5匹の姿が見えたところで私はいつものように缶詰をカバンから取り出した。

と、その時だった。

「お前だったのか、猫にエサをやってるのは。」

低い声が背後からして、心臓が口から飛び出そうになった。悪いことをしている子供が親に見つかったみたいな驚き方。

「す、すみません。」

私はとっさに謝った。

「あの看板よめないの？困るんだよね、そういうことされると。ニャーニャーうるさいし庭にフンはするし。」

男性はため息まじりに言った。

正しさを武器にして責めることは簡単だし、とても強い。私は正しさの前に立ち尽くすだけで、何も反論することができない。もやっとした感情が雪みたいに積もっていく。

そもそも、この子たちの中でニャーと鳴く子は1匹もない。

「すみません、気をつけます。」

今にも溢れそうな反論の言葉を飲み込んで、私は再び頭を下げた。

「気をつけますじゃなくて、二度とするな！」

白髪がひらひらと浮く男性は怒鳴り散らして去っていった。

あの男性は私に文句を言うために、もしかしたらこの冬の寒い朝にずっと待ち伏せていたのだろうか。

じっと公園を睨みつける白髪の男性の姿を思い浮かべたが、すぐにかき消すように頭を横に振った。

.

「おわー！ユキちゃん！久しぶりだね！大きくなったね！綺麗になったね！服かわいいね！」
マシンガンみたいに言葉を打ちつけて近づいて来たのは、先日ラインを送ってきた恵子だった。

「久しぶり！恵子は変わらないね」

私も恵子の顔を久しぶりに見て、テンションがあがった。恵子は昔と変わらずかわいい。

「変わらないってどういうことよ！これでもお化粧してるんだぞ！」

恵子が頬を膨らます。

「昔と変わらず、可愛いってことよ、相変わらず可愛いね、恵子は。」

私がため息まじりに言うと、なにそれ、と恵子は手を叩いて笑った。喜んでいるのだろうか。それとも久しぶりの再会で何を話しても笑ってしまう現象なのか。どっちともか。

私たちは成人式を終えて一旦帰り、着替えて小学校に来ていた。

学校も相変わらずで、昔よく当番で通っていたウサギ小屋も変わらず残っている。

男子にボールをよく投げつけていた体育館も、どっしり寡黙に同じ場所で座り込んでいる。

「タイムカプセル楽しみだなあ」

恵子は言った。

徐々にクラスのメンバーが集まって来た。子供を連れている人もいれば、ホストみたいな格好をしている人もいる。着ているものは変わったけれど、みんな顔は昔と一緒だ。

周りの人は、久しぶりの再会に喜んで、近況を話したり昔の思い出を話したりしている。

「タイムカプセルさ、もう本当何入れたのか全く分かんなくて楽しみだよ！」

恵子は1人、タイムカプセルの中身を想像してはしゃいでいた。私もなんとなく恵子の話につき合う。

温かい陽射しの隙間から、かき分けるように冷たい風が通り過ぎる。

持ってきたぞー

遠くで、大きな箱を抱えた男子2人組がうわずった声で言った。

待ってました、というようにクラスのメンバーが駆け寄る。

どすんと重たげな箱を置いた男の子が肩を揉みながら疲れた、と言いきぼした。

そんな男の子に簡単な労いをかけると、女の子たちは箱に一斉に群がった。

-- 公園の猫達みたい。

そんなひねくれたことを思ってしまう自分に、嫌気がさす。

今、公園の子猫達は何をしているのだろうか。お腹を空かせているのではない。私を探し回って、車にひかれてはいないだろうか。

つらかったね。由紀ちゃん。

筋肉質の体に覆われて言われた言葉を、今でも覚えている。

テレビで華々しく両手をかかげる卓球選手が目の前で涙を流し、その後ろで困惑したように口を半開きにする知らない男の人。

きっといつか、お母さんに会えるよ。

その言葉を私は、その時は信じていなかった。6才の私でも、死んだお母さんが二度と戻ってくることはないことぐらい、知っていた。

「由紀、私たちもいこっ」

恵子の声で私は現実に引き戻された。

あ、うん、と空返事をしながら、恵子を追う。

わあ、懐かしい、

恥ずかしいね、

おもしろーい、

といった感想がちらほら聞こえる。

「あった！」

恵子の明るい声と表情で、何があったのかはすぐに分かった。

「はい、これ由紀の」

ありがとう、と言ってA4サイズの青封筒を受け取る。汚い字で「濱屋由紀」とかいてある。

「ああ、何が入ってるんだろう！ドキドキする！」

恵子がいそいそと封筒のセロテープを剥がしている。

「由紀ちゃんのも、何が入ってるのかな。」

「なんだろう、覚えてないから」

そう笑って私は手元の青封筒を眺めた。

他の人よりも若干薄い青封筒。タイムカプセル。

私はこのタイムカプセルの中身を知っている。

公園の周りに植えられている木は何の木だろうか。この木何の木気になる木と思ってはいても、

葉の服を落として寒そうに揺れている姿を見ると、口ずさむ気になれない。

私も変わっている。

また懲りもせず公園に来てしまった。

別に意地になったわけじゃない。

ただ少し、墓参りに行く前に猫達の顔を見たくなっただけだ。

ミャー、と声が聞こえた。

私を見て鳴くミャーに、私は自分の口に人差し指を当てて、しーっとジェスチャーした。

伝わるはずがないジェスチャーのはずなのに、ミャーは鳴くことをやめた。

それから続いてミィー、マー、ムーとどこからか出てきた。

「あれ？グウは？」

私が尋ねても、猫達は返事をしない。足の周りをうろうろしている。

私は公園の中にあるベンチに腰掛けた。

うーん、と私はうなって、持っている封筒に目をやる。

タイムカプセルだ。

帰っちゃうの？と寂しそうな顔をする恵子の顔が頭に浮かぶ。

恵子だけじゃなく、誰1人にもタイムカプセルの中身を見られたくなかった。

私は何度も恵子に謝って、その場を去った。

青封筒を恐る恐る開ける。

手が寒さで震えている。

「マー」

マーが珍しく鳴いた。

封筒から出てきたのは、手紙と作文。

どちらも、私が書いたものだ。

6才の私がかいた作文と、10才の私がかいた手紙。

中身を覚えているといってもここまでだ。

作文と手紙の内容は覚えていない。でも、それが他人に見せるようなものではないことは分かっていた。

これは10年前の私が、私に向かって、私だけに向けてかかれたメッセージだ。

私だけが読み、私だけで決断しなければならない。

もともと、決断するには遅すぎるかもしれないけれども。

私は大きく息を吸い込んで、それらを読み始めた。

.

『拝啓20才の私へ

こんにちは。

元気に過ごしていますか。

私は今10才です。ですから、私は今10年後の自分に手紙をかいていることになります。10年後の私が何をしているのかさっぱりわかりません。バリバリのOLをやっているのでしょうか。それとも専業主婦として子育てと家事に奮闘しているのでしょうか。

どっちにしてもきっと私のことだから、ささいなことにくよくよしてすぐにいじけて周りに迷惑をかけることもたくさんあるでしょう。

私はそんなとき、よく本を読みます。本を読むと、自分の悩みがちっぽけなことに思えて気が楽になります。そもそも悩みが大抵はちっぽけなことなのですが。(笑)

ですが、そんな私にも1つだけ、大きな悩みがあります。今回の手紙の内容は主にそのことについてかくつもりです。

まずは、作文を読んでください。

そのあと、この手紙の2枚目を読んでください。』

青封筒のなかを除くと、茶色がかった古い作文用紙が入っていた。おそらく作文はこれだろう。とそのとき、私はあることに気が付いた。10歳の私がかいた手紙と6歳の私がかいた手紙の他に、もう一つ手紙らしきものが入っていたのだ。私は首を傾げた。こんなものをいれた覚えはない。とりあえず私は、その謎の手紙を読む前に、10年前の私の指示に従って作文を読むことにした。意識が作文に移る。

私はなぜか少し緊張して、口にたまる唾と空気を丸ごと飲み込んだ。

大きな悩み。

私は冷える指先をさすりながら思い出を探る。

辺りにふと目を向けても、グウの姿はまだない。

震える手で恐る恐る作文を開くと、タイトルには「おぼんのきせき」と可愛らしい文字でかいてあった。

今とは真逆の季節の夏の匂いが、ふと作文用紙からこぼれた気がした。

『おぼんのきせき』

夏休みが始まりました。まちにまった夏休みです。

なぜまちにまった夏休みなのかというと、予定がたくさんあるからです。

夏休みが始まる前、お父さんをお願いしたらプールと遊園地に連れて行ってくれると約束してくれました。お父さんは仕事が忙しいのに、私のお願いをきいてくれました。私はこのとき、将来お父さんに親孝行をすると決めたものでした。

プールと遊園地の他にも予定はあります。お母さんのお墓参りです。

8月15日、おぼんという日本の古き良き風習があるそうです。おぼんは死んだ人たちがあの世から

私たちのいるこの世にすこしだけ帰ってくる日です。私は幽霊はとても怖いですが、お母さんの幽霊なら平気です。

ですが、本当は幽霊なんて見えないことは私は知っています。私もそこまで子供ではありません。でもきっとお母さんは帰ってくると私は信じています。なので私はお母さんが喜んでくれるよう、元気な私を見せたいと思います。

私はお母さんに会ったことがありません。お母さんの写真はありますが、家族三人の写真はありません。それくらい早くにお母さんは亡くなりました。

お母さんのことが知りたくて、私はお父さんにお母さんのことをたくさん聞きました。

お母さんは優しくて美人だったそうです。お父さんはお母さんのどこを好きになったのと聞くと、人を思いやれるところと言いました。そして私もお母さんになて思いやりがあると言いました。私はお母さんになていると言われて、とてもうれしくなりました。

お父さんにお母さんのことを聞くと、お父さんはいつもお母さんをほめました。そして、少し悲しい顔をしました。きっとお父さんもお母さんのことを大好きだったに違いありません。お母さんがいなくて悲しいですが、お父さんは私よりも何倍も悲しいと思います。

夏休みが始まって、私はすぐに宿題を始めました。早めに宿題を終わらせてすっきりした気持ちで遊園地に行きたいと思ったからです。しかし、宿題を始めて三十分くらいたつと私の妄想がじゃまをし始めます。プールや遊園地で遊ぶ妄想です。こうなるともう宿題は手につきません。手につかず、お手上げです。結局遊園地に行くまでに宿題は半分しか終わりませんでした。

そしてついにこの日がやってきました。一週間がとても長く感じられました。一日は30時間あるのかと思ったほどです。そんなに一日が長いなら宿題は終わるだろ、とつつこみたいところはやまやまかもしれませんが、とにかく遊園地の日がきました。

当日は快晴でした。日頃の行いがよかったんだね、とお父さんは言いました。

遊園地は予想よりも人が多くて大変でした。でもお父さんの計らいで、私はたくさんのアトラクションに乗ることができました。どれも刺激的で楽しいものばかりでした。特に楽しかったのが水上ジェットコースターで、びしょびしょになりましたが涼しくて最高でした。

遊園地での出来事はこれで終わりではありません。実は私は迷子になってしまったのです。小学校中学年にもなって迷子だなんて恥ずかしいことですが、人が多かったので仕方がなかったのです。

ですがこんなことがあったときのために、私とお父さんはあらかじめはぐれたときの待ち合わせ場所を決めていました。私は一人で待ち合わせ場所の時計台に向かいました。

その途中のことです。私は私に会ったのです。最初は鏡かと思いました。しかし、それは私にそっくりな人だったのです。その人もこっちを見て驚いていました。

私は声をかけました。相手も私と同じくらいの年に見えたので、友達に話しかける感じで話しかけました。

私はまず名前を聞きました。するとさすがに名前までは同じではなかったようです。さきと言ったので、私はさきちゃんと呼ぶことにしました。私とさきちゃんはしばらく話して、一緒にアイスクリームを食べました。

アイスクリームを食べた後、お父さんのことを思い出してさきちゃんと別れました。

帰りの車で、私はさきちゃんのことを話しました。さきちゃんは見たい目は私とそっくりだけど、好きな食べ物や得意な科目も全然違ったことを話しました。さきちゃんが暮らしている町は私が暮らしている町ととても遠いことも分かったので、学校で会うこともないね、と言いました。お父さんは私の話を聞いて驚いていました。そんなにてたならお父さんも見たかったな、とお父さんは言いました。

しかし、その次の週にきせきは起きました。

8月15日、おぼんの日です。私とお父さんがお母さんのお墓に行くと、なんとそこにさきちゃんがいたのです！私は驚いてお墓の中なのに走って行ってしまいました。さきちゃんも私に気づいて、わっと驚いた顔をしました。

私は大声で言いました。

「さきちゃんもお墓参りにきたの！？」

するとさきちゃんはこう言いました。

「うん、ここにね、お母さんのお墓があるの。」

さきちゃんは指をさしました。そのお墓は、なんと私のお母さんのお墓でした。

さきちゃんと私のお母さんは一緒だったのです！さきちゃんと私の顔がそっくりな理由がわかりました。私たちは姉妹だったのです！すごいです。運命です。たまたま遊園地で話した人とお母さんが一緒だなんて！何万分の、いや何千万分の確立でしょうか。

わたしはこれをおぼんのきせきと呼んで、永遠に語り継ぐでしょう。』

読みましたか。

本当はこんな作文、びりびりに破って捨ててしまいたいのですが、20才の私にも読んでほしかったので我慢しました。

「おぼんのきせき」は、6才の夏休みにかいた作文です。見てわかると思いますが、6才の私はとても楽観的です(笑)

ですが、10才にもなると先ほどの出来事が一体どういうことなのか理解できます。私にそっくりな女の子が、私のお母さんと同じお墓に来ていた。2人のお母さんが同じなのに、どうしてお父さんが2人いるのか。

私はお父さんを問いただしました。しかし、お父さんは謝ってばかりでなにも話してくれません。

私は本をよく読んでいたので知っていました。

これはふりんなのだと。

お母さんはお父さんを騙して、他の男の人とも付き合っていたのです。

私はそのことに気がついたとき、とても悲しくなりました。

こんなに優しく思いやりのあるお父さんを、どうして裏切ったのでしょうか。

お父さんに謝ってほしいです。

私はお母さんを許しません。

もう、お墓参りにも行く気がありません。

怒りがつつつとあふれて、おかしくなってしまうそうです。

もう、授業参観で私だけお父さんでも恥ずかしくありません。

毎日美味しい手料理を食べたいとも言いません。

手作りの手さげ袋を友達から自慢されても、なにも思いません。

男の子からふりん女と言われても泣きません。

私はお母さんを許しません。

たとえ幽霊になって出てきて、謝ってきてでも許しません。

この思いを20才の私が忘れないように、タイムカプセルに入れました。

それではさようなら。

元気で暮らしてください。

.

懐かしい記憶が蘇ると共に、じわりと目頭が熱くなっているのを感じた。

ふと足元を見ると、猫たちが寒そうに1ヶ所にかたまっている。

反抗期、とでもいうのだろうか。私にもそんな時期があった。反抗期といっても私の場合親に怒鳴り散らすようなことはしなかった。ただ、父を無視し続けていたのだ。

その理由は自分でも分かっていた。

私が母のことを問いただしても何も答えなかったからだ。

当時私の中で母の印象は180度変わった。父を騙して他人とも子供を作っていた。タニンさんとハルタさんという大人がある日やってきて、そのことを教えてくれのた。10才にも満たない私には耐え難い事実だった。

父が激昂した姿を見たのは、その日が最初で最期だった。父は家にきた3人の男たちを突然追い返した。記憶が途切れ途切れであまり覚えていないが、とにかく3人の男は肩をすくめて帰っていった。

それから父と気まずい時期が続いた。

私は父の味方になりたかった。

父と一緒に、最低な母親をけなしたかった。しかし、父は母の悪口を全く言わなかった。

当時の私には、そのことが理解できなかった。

「ムー」

私の隣でもそとぞと動くムーがため息をもらした。

さわさわと風に揺られる木が、私の背中を後押ししているように思えた。

私はタイムカプセルに入っていたもう1つの手紙を取り、開いた。風に飛ばされないように他の手紙や作文はカバンを上から置いた。

手紙の文字を見てみると、まず私の字ではないことは分かった。でも、どこか似ている。緊張して書くときだけ変に丸みを帯びている字。まるで未来の私がかいたみたいだった。

なんとなくわかった。

これは母の字だ。

母が残した手紙。

なんとなくでなんの根拠もないし、そもそも母の字なんて見たことがない。

でもなぜだか、そんな気がしたのだ。

母の手紙がなぜこの封筒に入っているのか。

父が入れたのかもかもしれない。

タニンさんが入れたのかもかもしれない。

ハルタさんが入れたのかもかもしれない。

もしかしたら、母かも。

.

「ごめんね、ありがとう。」

幽霊になった母はそう言った。

私は今ハタチだ。季節の移り変わりも、朝早い静けさも懐かしく感じて温かい気持ちになることができる。

私はとっくに、母を許している。

父が私に事実を隠した理由も、タニンさんがきたとき突然怒った理由も、もう分かる。

私は2年前、母に会った。

母は若くて、綺麗だった。というより、若いままだった。20代のままだった。

手足は細くて白く、花柄のワンピースと一緒に体は透けて奥の風景が見えた。

さぐるさんという方に、教えてもらったのだ。

-- 辰野子橋に行くと、お母さんに会えるよ。

辰野子橋に行くと、寂しそうに立つ女性がすぐ目に入った。

母だった。

生まれて初めて自分の母を見てたじろく私に対し、母は私を見て泣いた。悲しみとか後悔とか、それと幸福も入り混じったような涙をたくさん流していた。雫が溢れて、体がどんどん透けていってしまうような気がした。

しばらく泣いて、母は私に謝った。

謝って、また泣いた。

私は母の言動を棒みたいにして見ていた。

どうしたらいいか、なんて言ったらいいのか、全くわからなかった。

たくさん謝った後、母は次にありがとうと言った。

ありがとうと言って、また泣いた。

雫が溢れて溢れて、キラキラと光っていた。

私は耐えられなくなって、一緒に泣いた。

母の手紙を読み終わって、私は立ち上がった。公園をでて、目的地へと足を進める。

目的地は、母のお墓だ。

久しぶりに行く気がする。おぼんのきせき以来だから、10年以上も前か。

お墓に行っても、母はいない。話しかけても返事は返ってこないだろう。

なぜならあの日、母は消えたから。

母は大粒の雫をこの世に落として消えた。笑って泣いてくしゃくしゃになった顔で消えた。あの表情のどこにも、もはや未練などないように思えた。

母は強かった。強くて、弱い人だった。

母は私に会ってわずか数分で消えてしまった。

「グウ」

突然足元で、聞き覚えのある猫の鳴き声がした。驚いて首をまわすと、そこにはグウと、もう1匹知らない猫がいた。

「グウ。」

新しい仲間、と私に紹介しているような気がした。

グウはまた一言短く鳴いて、公園の方へもう1匹の猫と歩いていった。

また、あとで公園へ行こう。

私はそう決意して、お墓へ向かった。

『 二人の素敵な男性に出会いました。』

健一くんは賢い人でした。

気がよくまわって、私がつらく苦しんでいるときはいつも助けてくれました。なのに健一くんは偉そうな態度どころか、私には敵わないなとか、君には助けられてばかりだとか言って、いつも謙虚で優しかった。

私はそんな健一くんが好きでした。

健一くんといると穏やかな気持ちになって、つい甘えたくくなりました。

健一くんの声を聞くだけで安心できました。

頑張らなくていいと言ったこと、覚えていますか？

クリスマスの夜です。

実はあの後、私は号泣してしまいました。

弱虫な私でごめんなさい。

大好きです。

仁くんは太陽でした。

仁くんの前で私は、他の誰でもない私でいられることができました。心の底から笑い、心の底から泣くことが出来ました。それは仁くんの笑顔のおかげです。

仁くんはよく笑いました。そして笑わせてくれました。

なんでもない日常が味方によっては美しく輝く。私は仁くんについてそう思いました。

仁くんは冗談が好きだけど、決して人を傷つけない。

私はそんな仁くんの優しい冗談がとても好きでした。

好きと言ってくれたとき、突然泣き出してごめんなさい。

私もあなたのことが好きです。

2人とも一緒にいてとても楽しかったし、不満があるときはケンカもしました。

2人にはそれぞれ違う過去があって歴史があって、私もその中にありたいと切実に思いました。

私は2人の男性を好きになりました。

愛しくて、一生そばにいたいと思いました。

けれどそんなことはできません。

どうして同時なのですか。

すこしでも時期が違っていたら。

運悪くすれちがっていたら。

ケンカしてそのまま別れていれば。

あるいは。

私が2人いれば。

くだらない幻想を抱いては、非現実なことを思い描いては、結局また会いたくなくなってしまふ。

私は弱い人間でした。

甘えていました。

ずるい。

だらしない。

汚らしい。

私は一人を選ぶことができませんでした。

かといって2人と別れることもできない。

私は最低な人間でした。

お腹に子どもがいるとわかったとき、私はどうしたらいいのかわからなくなって、泣きました。

最初は中絶を考えました。

2人には黙って中絶をしよう。と。

しかし、健一くん気づかれてしまいました。

妊娠を黙っていたことを、きっと怒られると思っていました。

しかし、健一くんはそうしませんでした。

私はたまらなくなって、また泣きました。

その夜、私は健一くんに全てを話しました。

仁くんのこと話しました。

2人のことが好きだと言いました。

そして、お腹の子が2人のどちらの子かわからないことも話しました。

私は謝りました。

泣いて泣いて、謝りました。

健一くんは黙って聞いていました。

健一くんは怒りませんでした。

健一くんは、もう一人の彼に事情を話すように言いました。

二日後、私は一人で仁くんに話をしに行きました。

話をすると、仁くんは驚き、悲しそうな顔をしました。

私はそれを見て、また泣きました。

泣いて、謝りました。

健一くんと仁くんは、私に中絶をしないよう言いました。

私は2人の言う通りにしました。

しばらくして、お腹が少しづつふくらみはじめました。

そして意外なことが分かりました。

お腹には二人の赤ちゃんがいたのです。

双子でした。

2人とも女の子であることもわかりました。

私の中に二つの命がある。

私の2人の娘...

娘が生まれたら、すぐにDNA鑑定をすることになりました。

その結果を受け、健一くんか仁くんが娘を引き取ることになりました。

私はその結果を知ることはありませんが、健一くんと仁くんなら、どちらであってもきっといい子に育つはずです。

健一くんの子だったら、成績は安心かもしれませんが、友人からの信頼も厚く、クラスの委員長なんかもやってのける器用な子になるのかも。でも私の血も継いでしまっているから、ドジなことをしてしまうこともあるかも。ごめんね。

仁くんの子だったら、まっすぐで明るい子になるのは間違いありません。男子に混ざってはつらつと運動する姿が目につかびます。けれど、すぐに泣いてしまう癖がもしかしたら私から受け継がれてしまうかも。

どんな子に育つかわからないけれど、2人とも元気に育ってほしい。

つらいことがあったらすぐに誰かに相談して。

泣きたいときは泣いてもいいの。

好きな人にはできるだけ素直でいること。

でも好きな人はできれば一人にしてください。

ストレスはこまめに発散すること。

信頼できる友人を一人でいいからもつこと。

歯磨きは毎日すること。

ご飯も毎日食べること。

あと

お父さんを大切にしてください。

ああ。

見たかった。

子どもたちの成長をこの目で。

初めてのハイハイを見たかった。

夜泣きで寝不足になりたかった。

初めての言葉を聞きたかった。

背中におさまりきらないランドセル。

入学式の写真を一緒に撮りたかった。

運動会で叫びたかった。

娘の初恋を聞きたかった。

反抗期にぶつかりたかった。

受験で、泣いて喜びたかった。

普通でいいから、特別な才能なんていらぬから、元気ならそれでいい。

あなたがいるだけで私にとっては特別なんです。

そう言える日が来てほしかった。

ごめんなさい。

ごめんなさい。

こんな私が母でごめんなさい。

私は許されないことをしました。

健一くん、仁くん、そして愛する私の2人の娘...

どうか生きてください。

あなたたちのことを思いながら今日、私は旅立ちます。』

.

墓には、もう誰もいない。

私は持ってきていた線香に火をつけて、そっと供えた。

二年前に、幽霊になったお母さんを見て、驚きでろくに話せないまま別れてしまったけれど、嬉しかった。

もしゆっくり話せたとしたら、一体何を話すんだろう。勉強の話、友達の話、初恋の話...

今になってからあふれるように思い浮かぶ。

でもよかった。

あのお父さんが好きになった人なのに、なにを苦しんでいたんだろう。

お母さんはきっと、いい人だったんだよ。

お母さんと過ごした時間はほんの数分だったけど、その数分で、一生分の愛をもらった気がしたよ。

お母さん、頑張ったね。

お母さん、ありがとう。

私は母の、誰宛かもわからない手紙を握りしめて、墓を後にした。